

2021年9月1日

みずほディーラーズアイ (2021年9月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 108.50 ~ 111.50

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

■ 先月の為替相場

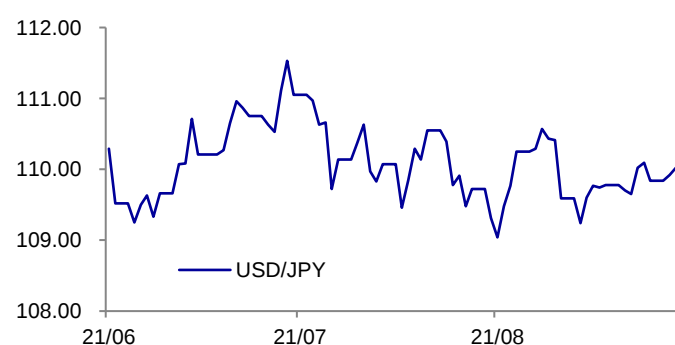
109円台後半でオープンしたドル円は、米7月ISM製造業景況指数が予想を下回ったことで109円台前半まで下落。翌日もドル売りが継続し先月につけた安値109.07円を下抜けると109円台を割り込んだ。一巡後は米株の堅調な推移や製造業受注、耐久財受注が市場予想を上回ったことで109円付近まで反発するも、米7月ADP雇用統計が市場予想値の半分以下となったことから、米経済に対する悲観的な見方が広がると108.73円をつける局面も見られた。その後、クラリダFRB副議長から「利上げに必要な条件は2022年の終わりまでに揃うだろう」「年末にかけての資産購入の減速の発表を支持」というタカ派寄りの意見が示されたことで109.70円付近まで急伸。さらに、米7月雇用統計は非農業部門雇用者数、失業率、平均時給が事前予想を上回りドル買いの流れとなると110円台を回復。翌週も東京市場祝日の9日に新型コロナウイルスのデルタ株の世界的な拡大が嫌気されリスク回避の動きが強まり下落するも海外時間に米株や原油価格が上昇に転じリスク選好の流れが強まる中、インフラ投資法案の上院可決をきっかけに上昇一時110.80円の高値をつけた。注目された米7月CPIはほぼ事前予想通りの結果にインフレ上昇率が鈍化したとの見方が広がり110円台前半まで反落すると米8月ミシガン大学消費者マインド指数が市場予想を大幅に下回るとドル売りが加速し109.55円まで下落することとなった。その後週を跨いでもドル売りが継続し、じり安の展開。8月NY連銀製造業景気指数が事前予想を大幅に下回ったことや中国経済指標の弱い結果、アフガニスタン情勢を巡る懸念を背景としたリスク回避の円買いが強まり、109.12円まで下落。しかし、円買いの流れは長くは続かず米金利上昇を受けたドル買いや対欧州通貨でドル買いが進んだことを受けて上昇し109円台半ばまで上昇した。公表された7月分のFOMC議事要旨ではハト派寄りな内容が示されると下落に転じ、再び109円台後半まで押し戻されると特段目立った材料のない中、109円台半ば付近での取引が続いた。23日週はジャクソンホール待ちの相場。週初に110円台を回復するもその後はテーパリング開始時期の後ずれ観測が強まり109円台半ばまで押し戻された。その後は、109円台後半で揉み合いとなった。注目されたジャクソンホール経済シンポジウムにてパウエルFRB議長の講演が行われ、年内にもテーパリングを開始する可能性を示唆したものの、その後の利上げについては急がない考えを示した。これを受けてややハト派的と捉えられ、ドル売りで相場は反応。結局110円を割り込むこととなった。月末にかけては目立った材料もなく109円台後半で推移。

■ 今月の見通し

今月のドル円はレンジ相場を予想する。注目されていたカンザスシティ連銀主催の年次シンポジウム(通称ジャクソンホール会合)ではパウエルFRB議長より「年内のテーパリング開始が適切になり得る」とされながら「テーパリングは利上げ時期を示す直接的なシグナルではない」とのコメント。想定よりもハト派な内容と捉えられたかドル円はやや下落して反応した。マーケットのテーマが「コロナからの回復」から「中銀の動き」に徐々に変わっている中でテーパリングを巡る動向が気になるところではあるが、ジャクソンホールや7月FOMCの議事要旨等の内容を勘案すると早くても年内テーパリング決定というのが本線か。円を積極的に買い進める環境でもないので下値も限られるだろうが、直近高値の110.80円レベルや年初来高値の111.66円を上抜けていくには材料不足な印象。前回のテーパリング時を見返すとテーパリングを「示唆」したのは2013年5月のこと。バーナンキ・ショックとして記憶している方も多いだろう。その後のFOMCではテーパリング決定はされず、結局、年末の12月のFOMCで「決定」され翌年1月から10ヶ月かけて実施された。パウエル議長やブレイナード理事のコメント等からも今後の経済指標を見たいといったスタンスが見て取れること、また、デルタ株の懸念があり影響が不透明な環境下では9月のFOMCではテーパリング決定には至らないのではないだろうか。そうした前提のもとでは上値は限られるものとみたい。ただし、8月中旬には中国経済指標の弱い結果、アフガニスタン情勢を巡るヘッドラインに円買いが進んだ局面も見られたが下値は109.12円と限られたもの。日米の経済政策への違いが明確になる中で、円買いの圧力も限られるものであった。今後も円買いを積極的に進める環境というのは想定しがたく下値についても限定的なものと想定している。

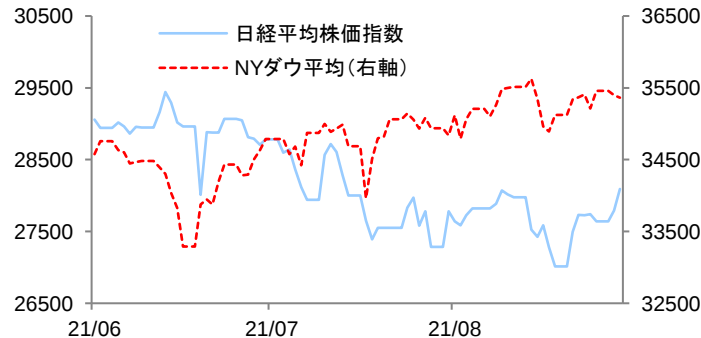
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	ISM製造業景況指数	7月	61.0	59.5	60.6
8/4	ISM非製造業景況指数	7月	60.5	64.1	60.1
8/6	非農業部門雇用者数	7月	870K	943K	850K
8/6	失業率	7月	5.7%	5.4%	5.9%
8/17	小売売上高(前月比)	7月	-0.3%	-1.1%	0.6%
8/26	GDP(前期比)	2Q	6.7%	6.6%	6.5%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	18名	111.50 ～ 108.63	ベア	3名	111.00 ～ 108.00	※ レンジは中心値				
田中	ブル	111.50 ～ 108.50	FEDによる年内テーパリング開始が見込まれる一方、利上げ時期はまだ視野に入らず。デルタ株感染状況や雇用を中心とした経済指標に注目しつつもドルは明確な方向感はず。ドル円は神経質ながらもリスクオン地合いに、もみ合い継続。				甲斐	ブル	111.50 ～ 109.00	テーパリング開始から利上げ開始時期や利上げスケジュールに関心が集まる。FRB高官からのタカ派発言が続くことを踏まえると、9月FOMCのドットチャートは一段切り上がる可能性も。ドル高が進みやすい展開は継続するだろう。
矢野	ブル	111.50 ～ 109.00	米国の年内テーパリング着手は既に織込み済みであり目線は利上げ再開時期に移っている。デルタ株の蔓延により市場心理は良くないもののあくまで一過性として見ており、時間の経過とともに下値を切り上げていこう。				小野崎	ブル	111.50 ～ 108.50	FRBによるテーパリング着手は既定路線となりつつあるが、9月FOMCではこれまで同様に大きな進展は見られないか。さらに、デルタ株への懸念もあり年初来高値更新といった上昇は見込み難い。ただし、円買い圧力は弱く下値も限定的。
筒井	ベア	110.50 ～ 108.00	111.5台を頂点に、下値を切り下げる展開を予想。米実質金利と米個人消費動向がカギ。住宅販売動向は好調だが、中古住宅在庫が増加し始めており、7月末期限の住宅ローン差し押さえ免除が終了した影響を市場は折り込むだろう。				玉井	ブル	111.50 ～ 108.50	ジャクソンホールはハト派と捉えられたが、年内テーパリング開始に向けた地ならしは進められると思われる。デルタ株感染拡大のリスクはあるものの経済活動制限には至るほどではなく、米金利上昇とともに底堅い推移を予想する。
加藤	ブル	112.50 ～ 109.00	デルタ株以外に世界金融市場に対する明確なリスクはなく、デフレ通貨としての円の魅力は薄れている。そうであればやはり各国によるテーパリングの開始時期が為替相場を左右しそうである。				原田	ブル	111.00 ～ 109.00	米国では3回目のワクチン追加接種の試みが準備される等、経済再開に向けて前進。係る中、テーパリングという明確な方向感是不変である中、現状低位安定している金利も、上昇し易くなりドル円も金利を横目に底堅い推移となろう。
伊藤	ベア	111.00 ～ 108.00	年内テーパリングがほぼ確定となったものの、利上げはまだ先の話。デルタ株感染拡大や地政学リスクが煽る中、ややドル高期待が先行している感あり。指標に頭打ち感がでてきており、一旦ドル売り主導で下値を試す展開には注意。				大庭	ブル	111.00 ～ 108.75	ジャクソンホールではパウエルFRB議長は市場と上手に対話が出来た。発言直後は金利低下と共にドル円も売られたが、110円付近を維持できたことを考えると、金融政策正常化への思惑から引き続きドル円は底堅く推移を予想。
山岸	ブル	111.50 ～ 108.50	ジャクソンホールで緩和縮小の年内開始姿勢を確認、金融正常化進展でドル堅調推移を予想。焦点は利上げに移り、デルタ株が一服し好調な米経済背景に雇用・物価で強い数字が出れば、金利先高観強まりやすい。FOMCの金利見通しに注目。				上遠野	ブル	112.00 ～ 109.00	実施時期を巡る思惑に揺さぶられつつも、他国に先駆けて金緩和縮小に向かう方向性は一貫。他通貨比ドル妙味高い状況は変わらず。デルタ株拡大、中東情勢の先行きを警戒しつつも下旬のFOMCに向けてレンジ上値を試す展開を想定。
牛島	ブル	111.50 ～ 108.50	テーパリングの年内実施が意識されるものの、米株は崩れずむしろ高値更新を続けている。当面はリスクオンが継続する中、円は売られやすく、ドル円は111円台を試す展開を予想。				小林	ブル	111.00 ～ 108.50	年内のテーパリング実施が決定されており、今後発表される経済指標が堅調な結果となれば利上げ観測へのポジティブ材料となる。他国対比米国が金融緩和の縮小に着手できていることが確かであり、他通貨対比ドル買い材料となろう。
尾身	ベア	111.00 ～ 108.00	ドル売りの流れは継続していると考えている。背景は、低金利政策の継続、財政拡張政策、世界的な通貨安選好の流れ。但し、堅調な米経済指標やテーパリング期待などが、ドル買いを底支えしておりスピードは緩やかだろう。				逸見	ブル	112.00 ～ 109.00	コロナの感染状況を横目にテーマは米金融政策。年内テーパリング着手が既定路線になりつつある中、米金利上昇とともにドル円は底堅い推移を予想。
上野	ブル	112.00 ～ 108.00	米国の年内テーパリング観測が高まりを見せる中で、ドル買い優勢の地合いが優勢になるのでは。とは言え、デルタ株の蔓延等、リスクセンチメントを冷やす、不確定要素も大きく、現状レンジから大きく上放たれる蓋然性も乏しいか。				大谷	ブル	111.00 ～ 109.00	年内のテーパリング開始が意識されている中、ドル円は堅調に推移すると予想。米国のコロナ感染者は足元増加傾向にあるものの、ワクチンのブースター接種も予定されており、ドル円のサポートとなろう。
山口	ブル	111.50 ～ 108.50	市場の注目は年内でのテーパリング開始から利上げのタイミングに移っていく中、今後発表される経済指標への反応は大きくなると予想。利上げ観測が高まるとドル買いが進むこととなろう。				鈴木	ブル	111.50 ～ 109.00	年内の金融緩和縮小開始が意識され、引き続きドルが買われる相場が継続。堅調な推移を続ける株式市場やコモディティ市場を背景とした円売り地合いもドル円のサポートになると思う
							大熊	ブル	111.50 ～ 108.50	米経済の回復は失速したとはいえ日欧と比較すると堅調で、金融正常化も進展する状況下、米金利も上昇余地があると思われる。また、アフガン情勢による地政学リスクはドル買いの流れになりやすく底堅い推移を予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1600 ~ 1.1950
EUR/JPY 129.50 ~ 132.50

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

■ 先月の為替相場

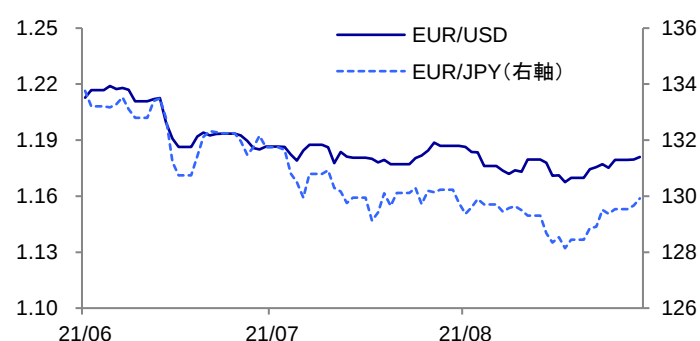
先月のユーロは、じり安の展開となった。月初2日は1.1865でオープン。しばらく小動きでの推移となったが、4日の米7月ADP雇用統計の結果が予想比悪化したことによるドル売りに、8月の高値である1.1899まで上昇する場面も見られた。しかしその後のクラリダFRB副議長のタカ派発言や米7月ISM非製造業景況指数の好結果がドル買いにつながり、ユーロは反落。6日の米7月雇用統計では、非農業部門就業者数、失業率、平均時給がいずれも予想比良好な結果となると全面ドル買いとなり、ユーロは下げ幅を拡大した。翌週9日は、1.1750 でオープン。米金利上昇を受けたドル買いの流れは継続。10日、独8月ZEW 景気期待指数が事前予想を大幅に下回ったことからユーロ売りが強まったほか、米金利上昇によるドル買いでその後も軟調地合いとなった。11日も、1.17 台前半からじり安の展開。その後に発表された米7月CPIの結果を受けて、一転ドル売りが加速し、1.17 台半ばまで値を戻した。13日には、ユーロ圏8月貿易収支が市場予想を大きく上回ると、1.176 台まで上昇。その後も、米8月ミシガン大学消費者マインド指数が市場予想を大幅に下回ると、1週間ぶりの1.18 台を回復し、1.1794で越週した。翌週16日は、1.1795でオープン。その後アフガン情勢を巡る地政学リスク等が意識されたリスクオフの流れに、1.17 台後半で上値重く推移。その後も、FOMC議事要旨発表にかけてドル買いが強まり、昨年11月以来となる1.17 割れを示現。19日には米株安を意識したリスク回避のドル買いに押され1.1666 まで下落した。20日は前日の流れを引き継ぎ8月の安値である1.1664まで下落する場面も見られたが、その後は1.17 付近まで上昇し、1.1699で越週した。翌週23日は、オープン直後に1.1694 まで下落。その後は落ち着いた動きとなり、1.17 台半ばまで反発して引けた。24日、25日は、落ち着いた動きとなり、1.17 台で推移した。26日は、ECB政策理事会議事要旨の公表や、翌日にジャクソンホール経済シンポジウムを控え様子見ムードが広がった中、小幅な値動きが継続した。27日は、ジャクソンホール経済シンポジウムにてパウエルFRB議長の講演が行われ、年内にもテーパリングを開始する可能性を示唆したものの、その後の利上げについては急がない考えを示した。これを受けてドル売りで相場は反応し、1.1798で越週した。翌週30日からの最終週は、週末に雇用統計を控える中、動意の薄い展開で推移。1.18 ちょうどを挟みもみ合い推移が続いた。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は軟調な推移を予想。足許、欧州圏は行動制限の解除などにより4-6月期の経済は予想外のプラス成長となった。より感染力の強いデルタ株の蔓延により、英国やフランス、スペインなどは再び新型コロナの感染拡大となっているものの、ドイツやイタリアなど感染をうまく抑え込んでいる国もあり、欧州全体では新型コロナへの対処はうまくいっているといえる。直近では、新型コロナワクチンの接種者と未接種者に行動制限の違いを課すことで、感染抑制とワクチン普及を同時に行う政策を実施。米国のみならず、欧州圏内においても3回目の追加接種の試みが開始に向けて準備されるなど、見通しは前向きだ。係る状況下、新型コロナに加えて議論となるのが、やはり欧州及び米国の金融政策だろう。先月行われたカンザスシティ連銀主催の年次シンポジウム(通称ジャクソンホール会合)では、年内にもテーパリングを開始することを示唆したものの、テーパリングは利上げ開始とは別とする考えを示したことで、一部で予想されていた程タカ寄りにもならず、結果に動意は出ず。やはり、利上げのタイミングは経済データ次第ということだろう。一方、今月9日にはECB政策理事会が予定されている。現状の市場予想は現状維持がコンセンサスとなっている。ECBの金融緩和の主力であるパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の購入については、現状の週190億ユーロの購入ペースが続けば来年3月で目標金額に達してしまう公算。デルタ株の蔓延により、再度経済回復に不確実性が増している状況に鑑みると、今回の理事会では購入ペースの減額はなさそうだ。ただし、残された時間も限られており、購入ペースの見直し変更もリスクシナリオとして留意しておきたい。テーパリングに向かう米国に対し、未だ動けない欧州との金融政策の方向感の差はやはり意識されるところだろう。米金利に対し、一部弱気な声も聞こえ始めており、米金利も併せて上昇してくることがあれば、ユーロはより軟調推移を強いられそうだ。

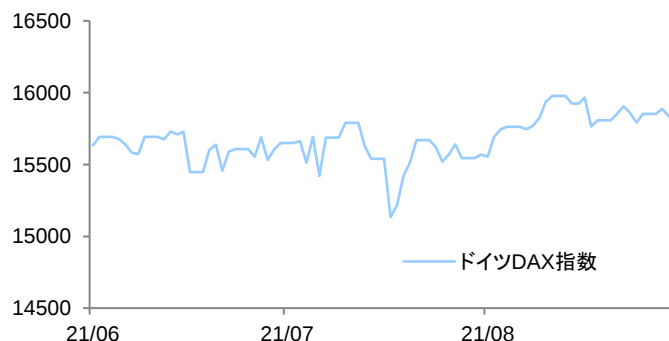
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	ユーロ圏製造業PMI	7月	62.6	62.8	62.6
8/3	ユーロ圏PPI (前年比)	6月	10.3%	10.2%	9.6%
8/4	ユーロ圏サービス業PMI	7月	60.4	59.8	60.4
8/4	ユーロ圏小売売上高 (前年比)	6月	4.4%	5.0%	8.6%
8/10	ドイツZEW景気期待指数	8月	55	40.4	63.3
8/13	ユーロ圏貿易収支	8月	10.8b	12.4b	13.8b
8/25	ドイツIFO景況感期待指数	8月	100	97.5	101

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	4名	1.2000 ～ 1.1700	ベア	17名	1.1900 ～ 1.1600	※ レンジは中心値				
田中	ベア	1.1900 ～ 1.1600	年内テーパリング開始を見込むFEDと緩和姿勢継続のECBとの金融政策の違いがユーロドルの上値を抑える状況は継続。また9月下旬の独連邦議会選挙ではSPD有利が伝わり政局不安もユーロにはネガティブとなろう。				甲斐	ベア	1.1850 ～ 1.1600	米国のテーパリング・利上げに関する期待が高まる中、ECBの出口論が高まるにはまだ時間がかかると思われる。金融政策の差が一段と浮き彫りとなると思われ、ユーロ安は継続すると思われる。
矢野	ベア	1.1900 ～ 1.1650	米国のテーパリング観測が高まる一方、ECBのそれは未だ展望出来ず。金融政策のスタンスの違いは大きくEURを積極的に買う理由は見当たらない。9月FOMCの結果によっては、EURは年初来安値を試す展開も想定しておきたい。				小野崎	ベア	1.2000 ～ 1.1500	テーパリング議論開始の見込めるFRBに対し慎重姿勢のECB。両社のスタンスの違いを勘案すればUSD買い優勢の動向が見込まれる。
筒井	ブル	1.2000 ～ 1.1700	米国のテーパリングを織り込んだ8月下旬の市場動向をみるに、市場はユーロ売りポジションに偏っているとみる。ユーロ安にはもう一段の材料が必要で、むしろ思いのほかユーロ高が進むことを懸念すべき時期。中国の経済状況は注目。				玉井	ベア	1.1900 ～ 1.1650	FRBが年内テーパリング開始に向けて地ならしを進める一方で、ECBはハト派姿勢を続けている。またドイツでは総選挙を控えており警戒感も強い。ユーロは上値の重い動きを予想する。
加藤	ベア	1.1900 ～ 1.1600	実需面での圧倒的な通貨需要が存在し、それはユーロ高を示唆するが、メルケル政権の終焉に向かえるタイミングで米国との比較でバランスシートの相対規模に比べて高すぎるユーロ高の修正を予想する。				原田	ベア	1.1950 ～ 1.1600	今月9日にはECB理事会が予定されており、市場予想は現状維持。一方、テーパリングに向かう米国に対し、欧州との金融政策の方向感の差はやはり意識されるだろう。米金利も併せて上昇してくれば、ユーロは軟調推移となろう。
伊藤	ブル	1.200 ～ 1.165	欧米の金融政策スタンスの違いを考えるとユーロを積極的に買う理由はなく、ドルの強弱に連れた動きとなろう。ただ、ECBタカ派メンバーの圧力が増しており、ECB理事会きっかけに上昇も。リスクは上方向。				大庭	ベア	1.1850 ～ 1.1650	コロナの見通しが立たない中、9月のECB理事会もPEPPの購入ペースは現状維持の公算が大きく、金融政策の正常化には道のりが長そう。係る状況下、FRBの高官発言で再びタカ派が目立てば、ユーロの上値は抑えられる展開を想定。
山岸	ベア	1.1900 ～ 1.1650	足元のECB高官発言などから9月理事会での追加緩和可能性は後退も、16年間の長期政権となった独メルケル首相退任後の政治空白リスク、陸続きのアフガン情勢から欧州の地政学リスクが意識されやすく、ユーロの上値は重いと予想。				上遠野	ベア	1.1850 ～ 1.1650	目先下旬のFOMCに向け米国早期テーパリング/利上げ期待が高まる一方、ECBの慎重姿勢は当面継続予想であり、引き続き金融政策の乖離感からユーロ上値は重いか。下旬にはドイツ連邦議会選を控えていることもあり警戒感が燃る。
牛島	ブル	1.2000 ～ 1.1700	欧米の金融政策スタンスの違いから引き続きユーロは上値重い状態が継続しそう。ただし、IMM通貨先物ではEURネットロングが大きく縮小済みであることから、一層のユーロ下落には材料難か。				小林	ベア	1.1950 ～ 1.1600	ジャクソンホールにおいて米国が年内テーパリング開始を決定している一方、9月に予定されているECB理事会では政策変更なしと見込まれている状況。両国における政策方針の違いからドル対比ユーロは軟調推移となるか。
尾身	ブル	1.2100 ～ 1.1700	EURは堅調地合いが継続すると予想している。背景は、ドル売りの継続。リスクはECBによる政策金利の引き下げなどが考えられるが実現の確度は低そうだ。				逸見	ベア	1.1900 ～ 1.1600	コロナの感染状況を横目にテーマは米金融政策。年内テーパリング着手が既定路線になりつつある中、米金利上昇とともにドルが底堅い展開を想定。ユーロの上値を抑える材料となると考える。
上野	ベア	1.1900 ～ 1.1600	米国が前頁の金融政策方針である中で、出口戦略が見出せない欧州の通貨が強含む蓋然性は乏しいか。米経済指標を受けた浮沈はあれど、基本的には上値の重い推移になるのでは。				大谷	ベア	1.1850 ～ 1.1650	米国においてテーパリング期待が高まる中、ユーロは上値重い推移が継続すると予想。ただし、直近のECB高官発言では、ユーロ圏における景気回復の経済見通しも示されており、下値は限定的であると考え。
山口	ベア	1.1850 ～ 1.1600	ECBによる金融緩和の長期観測が高まるなかユーロは上値重く推移すると予想。9月末にはドイツ連邦議会選挙が予定されている。左右両派に跨る3党以上の大連立となる可能性が高く、連立交渉は今後難航を予想。ユーロの重しとなろう。				鈴木	ベア	1.1900 ～ 1.1600	FRBが年内のテーパリング開始の姿勢を示している一方、ECBの政策は基本的には不変。当局のスタンスの違いは大きく、ユーロの軟調推移につながるだろう。
							大熊	ベア	1.1900 ～ 1.1650	テーパリングが視野に入るFRBと金融引き締めに慎重なECBとの立ち位置の違いは明確で、金融政策運営の格差によりユーロ売りに傾きやすい上に、独の総選挙の不透明感もあることから、軟調推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3450 ~ 1.3900
GBP/JPY 148.00 ~ 153.50

欧州資金部 本多秀俊

■ 先月の為替相場

8月のポンドは、対ドルで、上値の重い軟調気味の横ばいから、急落、月末を前に底打ち反発。ただし、対円、対ユーロでは、月初の上昇から、天井を打って反落、月末を控えて底打ち反発と、若干異なる展開を見せた。つまり、月初、ドルに次ぎ堅調推移を見せた後、月央に前後して全面安、更に月末に掛けて全面反発という推移をたどったことになる。月初のドル全面高には、米連銀による早期金融緩和縮小(=金融引き締め)観測の広がりが見られた。4日、米連銀クラリダ副議長が、2023年に利上げを開始する可能性を示唆。更に、6日発表された米7月雇用統計が市場予想を明確に上振れたことなどもドル続騰に貢献した。並行して、5日公表された英中銀8月金融政策委員会議事録が、金融引き締めへ転じる時期に関する議論を本格化させた様子を見せたことが、「ドル寄りの通貨=金融引き締め開始に近い通貨」として、ポンドをドルに次いで堅調な通貨としたようだ。10日に、対円で153.32、対ユーロで0.8450と、それぞれ8月の高値をつけたポンドは、その後、全面安へと転じていった。ただし、この局面のポンド安の要因ははっきりしなかった。上述、米連銀の早期金融緩和縮小観測(18日の米連銀7月公開市場委員会議事録は、「参加者の大半が年内の金融緩和縮小開始が適切と判断」した事実を明らかにした)、中国政府による規制強化や中国経済指標の低迷、アフガン情勢を巡る不透明感、「有事のドル買い」や「リスク回避の円安」を裏付ける要因にはなかったものの、ポンド全面安の説明にはならなかった。英7月CPI(18日)の下振れや、ラーブ英外相辞任観測の広がり(19日以降)、英7月小売売上高(20日)の大幅下振れなどは、確かにポンド売りの要因たり得たはずだが、これらはいずれもポンド全面安局面の最終盤に起きたことだった。ポンド全面安は、20日まで続いたが、週末を挟んだ23日以降、ポンドは一気に全面高に転じた。残念ながら、この局面のポンド高要因も現在に至るまで詳らかではない。市場の関心は、27日の米連銀パウエル議長講演に集中していたが、同講演を目前に控え、それまでの流れの反対売買、すなわちドルの売り戻しや円の売り戻しが進んだ可能性は考えられたかもしれない。注目のパウエル議長講演は、ドル全面安を誘う結果となった。早期金融緩和縮小の示唆という目線で、「年内のテーパリング開始適切になるかもしれない」との部分、市場の期待に応えた形になったものの、同時に「テーパリングは利上げ開始を直接示唆するものではない」と述べた部分が意表を衝いた格好で、「米連銀は利上げ開始に積極的でない(利上げ開始を急がない)」との思惑を広げたものを受け止めた。

■ 今月の見通し

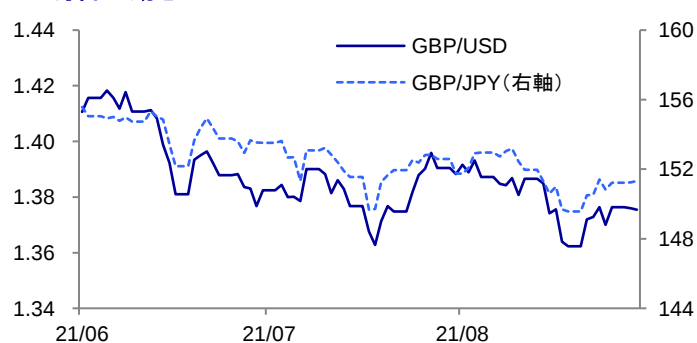
今月のポンドは、方向感を欠いた膠着の先行から、月央以降、英政治経済動向を材料視した下落を予想。8月のポンド相場は、相応の上下動を見ながらも、英側の要因に乏しく、ほとんどはドルや円の値動きに見えた。その状況が早晩変化するとも考え難く、パウエル議長講演が片付いた今、金融市場の関心は、まずは3日の米8月雇用統計に向かうのではなかろうか。前後して、米金融政策動向を唯一最大の材料とした相場展開は、今しばらく継続する可能性が高いものと見込む。それでも、英下院が夏休み明けとなる6日以降、英固有の政治経済動向に市場の注目が集まり、ポンドが材料視するような局面が訪れる可能性もある。8月後半、英国内の報道は、アフガン情勢一色だったが、アフガニスタン撤退に絡む混乱は、バイデン米大統領の失態との見方が支配的で、英国内で与野党が激しく論戦を交わすような事態には至らなかった。しかし、政治的に紛糾し、世間の耳目を集めるような問題は、既にいくつか展望できる。コロナ禍、ブレクジットによるEU国籍の労働者不足に加えて、「ピンデミック」と呼ばれた、コロナ罹患者と接触した可能性のある人たちの自己隔離などを要因に、イギリスで、この夏、人手不足が物流の混乱をきたしたのは記憶に新しい。秋の収穫期を前に、当地では、またぞろ、農業従事者の不足に対する懸念の声が強まっている。長距離トラック運転手などの不足も未だに深刻で、英産業界からは、労働者確保のために「EU市民に一時的なビザ給付」を求める声が強まっているが、英政府からは、「英国人を採用するように」との指示があるばかりで、ブレクジットの影響を緩和しようとの意向は読み取れない。また、雇用維持のため、賃金の一部を国が負担する「一時帰休金」の給付も、9月末で期限切れを向かえる予定。ワクチン接種の進捗を受け、市井にはかなり日常の生活が戻ってきたとはいえ、デルタ株の蔓延などを受け、コロナに対する警戒感は引き続き強い。過去4回延長された同給付の5度目の延長を求める声が出るのも避けられないと思われる。英に限ったことではないものの、現在は若年層における感染拡大が大きく懸念されている。青少年のワクチン接種の遅れがその原因と見られているが、授業を再開する学校がコロナの温床になる可能性が警戒されている。こうした問題は、いずれも、英経済に対する直接の打撃が懸念されると同時に、政府が対応を誤れば政治問題にも発展しかねない。ジョンソン首相の政権基盤がカミングアップ首相特別顧問の進出や、パンロック保健相辞任などを経ても

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』
2012年に当地(ロンドン)でオリンピックが開催された際は、「そ～言えばいつから始まるんだっけ?」「ホテルもがら空らしいよ」といった感じで、直前までほとんど誰も気に掛けていない風情でしたが、いざ始まってみると大変な熱狂で、連日、たいそうな盛り上がりを見せたものでした。今回、コロナ禍で人と会う機会がめっきり減ったせいもあり、やはり、直前までオリンピックの話題で盛り上がるようなことは、身の回りで一切なかったのですが、「果たして、今回はどうなるだろうか?」と思っていたら、やっぱり、盛り上がりましたね。緒戦で、男子飛び込みのペアがいきなり金メダルを獲得したのも、イギリス人の熱狂に火を点けたように感じました。日本との違いで感じるのは、やはり、人気の競技が違うことで、乗馬とか、テコンドーとかは、日本ではあまり知られてなかった記憶だし、自転車やボートなどは当地では大変な人気種目です。ただ、当地で最も特徴的なのは、実は、オリンピックではなく、パラリンピックに対する関心の高さではないかと思います。パラリンピックの戦績などは、テレビニュースでも大きく取り上げられているし、中にはエリー・シモンズ選手(水泳女子)のように、国民的知名度(household name)を持ったパラリンピアンもいます。「パラリンピックの起源はイギリスにある」という話を耳にし、調べてみたところ、確かに、その起源は1948年ロンドンオリンピックの際に開催された、車椅子患者によるアーチェリー大会にまで遡ることができるとのこと。当初は、戦争で負傷した兵士たちのリハビリテーションとして始められたのだそうです。なるほど、イギリス人は、ゴルフやサッカーなど「発祥の地」であることにプライドを抱いている節がありますが、パラリンピックに対する強い関心も、「我々が始めたこと」という誇りと結びついたものなのかもしれません。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	英中銀基準金利		0.100%	0.100%	0.100%
8/12	GDP暫定値(前年比)	Q2	22.1%	22.2%	-6.1%
8/12	鉱工業生産(前年比)	7月	9.4%	8.3%	20.7%
8/12	製造業生産(前年比)	7月	13.4%	13.9%	28.2%
8/12	商品貿易収支(百万ポンド)	6月	-9200	-11988	-9601
8/17	ILO失業率(3か月)	6月	4.8%	4.7%	4.8%
8/18	CPI(前年比)	7月	2.3%	2.0%	2.5%
8/20	小売売上高(前年比)	7月	5.9%	2.4%	9.2%
8/20	財政収支(億ポンド)	7月	-119	-104	-215

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7150 ~ 0.7430
AUD/JPY 78.00 ~ 81.60

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

8月一週目、2日は原油安に伴う米金利低下や軟調な米7月ISM製造業景況指数を背景に豪ドルは0.73台後半へ上昇。3日はRBA理事会で9月からのQE縮小を予定通り行くと発表し、0.74台へ上昇した。4日はNZ7月失業率が4.0%へ改善し、豪ドルも連れ高となり再び0.74台のせ。中国7月PMIが予想を上回った事や軟調な米7月ADP雇用統計も豪ドルを支えた。6日、ロウRBA総裁が議会証言で8月理事会でテーパリング延期を検討したと述べた事で0.7380近辺まで下落した。堅調な米7月雇用統計で更に0.73台半ばまで下押しした。二週目は0.73台で振幅し方向感に欠ける展開となった。三週目は0.71台へ急落。16日、NSW全域のロックダウン強化や中国7月小売売上高や鉱工業生産鈍化で一時0.73台前半まで下落。17日、8月RBA議事要旨で、今後ロックダウンが景気後退を悪化させれば、政策面で行動をとる用意があるとし、テーパリング見直しの可能性が示唆され豪国債利回りが低下、豪ドルも年初来安値0.7290を下げた。その後軟調な米7月小売売上高を受けて米株が下落すると一時昨年11月来の安値0.7243を付けた。18日、米国FOMC議事要旨ではメンバーの大半が年内のテーパリング開始について前向きであることが確認され、株価が下落。豪ドルは頭を抑えられ0.7230近辺で引けた。19日、豪7月雇用統計で失業率が4.6%に改善し、小幅上昇したもののすぐに下落。NSW州新規コロナ感染者が2日連続で過去最高多を記録する中、鉄鉱石価格下落等も背景に、豪ドルは下値を追う展開となり、10カ月ぶり安0.7143を付けた。20日、NSW州ロックダウンが9月末まで延長との報道を背景に、軟調な値動きが続き一時10カ月来安値0.7107を記録。四週目はドル安を背景に0.73台まで上昇。23日、モリソン豪首相がワクチン接種率が上昇すればロックダウン緩和を始める必要があるとし豪ドルが支えられた。米国でデルタ株感染拡大を背景にテーパリング時期が後ずれする見方が強まった事も米ドル安に繋がった。24日、ジャクソンホール会議を控えた米ドル売りの流れから、0.7260近辺まで上昇。尚、隣国ではホークスビーRBNZ総裁補が前回の会合で50bpの利上げも検討していたことを明らかにし、NZドルは大きく上昇。26日、カブール空港周辺で爆発との報道で株価が急落、豪ドルも下落幅を拡大させ0.7240近辺で引け。27日はパウエルFRB議長が講演で、年内のテーパリング開始を示唆するも、テーパリングは利上げ時期を示すものではないとの見方を示し、ハト派色の強い内容を受けドル売りを背景に豪ドルは0.73台へのせた。

■ 今月の見通し

9月の豪ドルは国内の新型コロナ関連要因では軟調に推移するものの、ジャクソンホール以降のドル売りを背景に豪ドルは支えられており、0.73台を中心にレンジ推移するとみる。

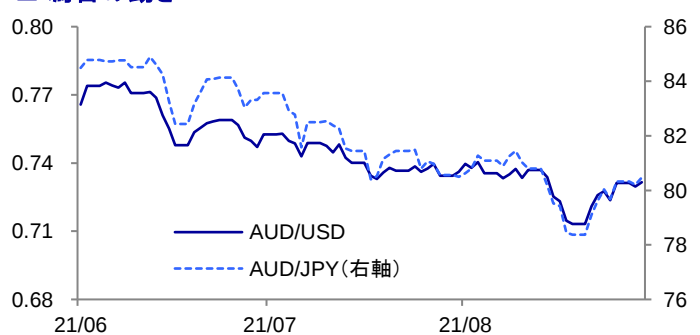
先月はシドニー及びメルボルンのロックダウン継続でリスク地合いが悪化する中、中国景気減速懸念(中国7月鉱工業、小売売上高の予想比下振れ)、ハト派的なRBA議事要旨の発表、ニュージーランド全土ロックダウン、鉄鉱石価格の下落等を背景に豪ドルは0.71台まで急落し、昨年11月以来の安値を更新した。一方、FEDメンバーおよびFOMC議事要旨では、米国の早期テーパリングを後押しするような内容が相次ぎ、米ドル高が進行。豪ドル安に拍車をかける結果となった。加えてジャクソンホール会合でのパウエルFRB議長によるテーパリングの後ろ倒しにかかるハト派コメントが米ドルは売りで反応しており、下落トレンドが続いていた豪ドルも支えられている。

豪州の新型コロナ新規感染者数は8月末より1日の新規感染者数が連日1000人を超え、依然高止まりが続いているが、モリソン豪首相が目標を「感染件数ゼロ戦略」から「入院率の低下」に転換したことでロックダウン解除へのロードマップが見えてきたとみる。今後ワクチン接種率を基準としたロックダウン緩和プランが具体化していく過程では豪ドルのサポート材料となるとみる。この他、中国の堅調な需要とブラジルでの供給問題を背景とした鉄鉱石価格の上昇も豪ドルの支えとなろう。

但し、デルタ株感染拡大の震源地とされているNSW州では10月にICU(集中治療室)の利用がピークに達するとしている為、国民のワクチン接種率が進んでもロックダウン延長となりうるような感染状況の進展には引き続き注意を払いたい。今後の豪経済の行方は経済活動再開時期とロックダウンの期間に左右される為、NSW州ロックダウンの段階的解除の具体的な内容が9月末にかけて出るとみられており、ロックダウン解除のロードマップが明確に開示されるまで豪ドルは上値の重い展開を予想する。

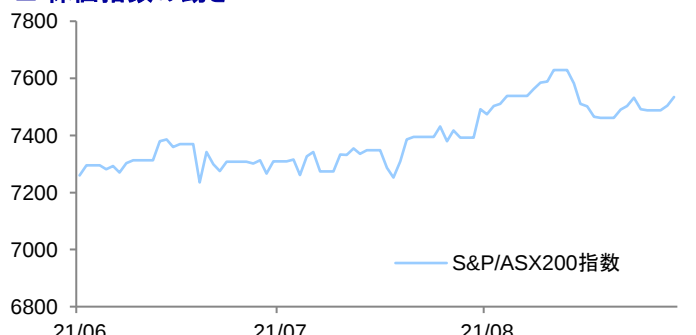
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	住宅建設許可件数(前月比)	6月	-0.4%	-6.7%	-7.1%
8/3	RBAキャシュレト	8月	0.1%	0.1%	0.1%
8/4	小売売上高(前月比)	6月F	-1.8%	-1.8%	-1.8%
8/5	貿易収支	6月	A\$10450m	A\$10496m	A\$9269m
8/11	消費者信頼感	8月	-	-4.4%	1.5%
8/19	正規雇用者数変化	7月	-	-4.2k	51.6k
8/19	非常勤雇用者数変化	7月	-	6.4k	-22.5k
8/19	参加率	7月	66.0%	66.0%	66.2%
8/19	失業率	7月	5.0%	4.6%	4.9%
8/27	小売売上高(前月比)	7月	-2.5%	-2.7%	-1.8%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2450 ~ 1.2950
CAD/JPY 85.00 ~ 89.00

米州資金部カナダ室 芦崎瑞穂

■ 先月の為替相場

8月USD/CADは1.2466でオープン。ワクチン接種の普及が進展する中、世界では新型コロナウイルス変異株が急速に拡大。再び経済回復への期待に陰を落とした。米連銀総裁の相次ぐタカ派発言や米経済指標の良好な結果に早期テーパリング観測が徐々に強まる中、デルタ株拡大への懸念や中東情勢悪化への警戒感も相まってUSD/CADは1.2949まで上昇。月後半はパウエルFRB議長の「経済見通し」がハト派姿勢だったことを受けUSD売り圧力が再び高まり1.26台前半へと下落しUSDドル安基調が続いた。

3日デルタ株の拡大への懸念によるリスク回避ムードと原油安がカナダドル売りに拍車をかけ、USD/CADは1.2576まで上昇。5日米新規失業保険申請件数が予想を上回る結果となりリスクオフ地合いがやや軟化。USD/CADは一時1.2475をつける。6日米7月雇用統計は非農業部門雇用者数が前月から続伸。一方カナダ7月雇用統計は雇用者数の伸びが予想を大きく下回った。米長期金利の上昇と共にUSD/CADは1.2581まで急伸した。11日米7月消費者物価指数の伸びが鈍化。“物価上昇は一時的”とのFRBの発言を裏付けるかたちとなり、早期テーパリング観測が後退。また米エネルギー情報局(EIA)による原油需要見通しの引き上げに原油価格が上昇したが、カナダの経済指標の結果もまちまちで、USD/CADは1.2490をつけた後下げ渋る。その後は狭いレンジでのみみ合いが続いたが、16日中国経済指標の悪化やアフガニスタン情勢への懸念からUSD買いとなりUSD/CADは1.25台後半へと上昇。7月のFOMC議事録要旨で大半の参加者が早期テーパリングを示唆したとの内容を受けUSD/CADは1.28を上抜け続伸した。更に20日拡大するデルタ変異株への懸念と原油価格の続落がUSD買いを加速させUSD/CADは1.2949まで上昇した。23日中国の新型コロナウイルス感染者数が7月以来初めてゼロになったとの報道が伝わると、中国経済回復への期待に原油価格が大幅に回復。また8月米総合購買担当者景気指数(PMI)が3ヶ月連続で低下するなど、米経済指標の軟調な結果やダラス連銀総裁のハト派発言にテーパリングへの警戒感が和らぎUSD/CADは1.25台後半へと反落した。26日はアフガニスタンのカブール空港で爆発があったとの報道や米連銀総裁のタカ派発言にUSD/CADは1.2708まで反発するが、注目の27日ジャクソンホールミーティングでのパウエル議長の公演では年内のテーパリングを示唆するものの具体的な時期は示されず、データを重視での現行のスタンスが維持されることからUSD/CADは1.2606まで下落。月末は原油高につれて1.25台後半から1.26台前半で推移。

■ 今月の見通し

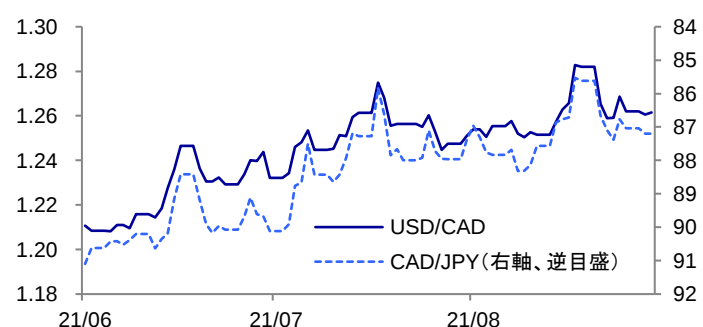
カナダでは新型コロナウイルス感染第3波からの規制緩和が始まったと思ったのも束の間、デルタ株の蔓延で第4波入りとなった。カナダのワクチン接種率は高く、感染はワクチン未接種の若者が中心であり、ウィズコロナ期に向けた取り組みが始まりつつある。モデルナがカナダでワクチンの製造を開始することをカナダ政府と合意し、ますます接種率が高まると期待されている。また各企業などでワクチン接種の義務付けが進められていたり、海外旅行やイベント参加などの際に公的に証明できるワクチン接種証明の発行などもケベックやバンクーバーなど州単位で実施しているところもある。こうした中、トルドー首相は議会下院を解散し9月20日に総選挙を行うと発表した。現在のトルドー率いる与党自由党は少数派政権であり野党の協力が必要としている。新型コロナウイルス第4波が始まったばかりのこの時期に選挙を行うことについて、野党や国民から批判が出ている。またカナダ政府のアフガニスタン情勢への対応にも不満があり、世論調査では保守党が自由党に僅差でリードしている状況だ。選挙での相場への影響ははばばないと思われる。8日はカナダ中央銀行政策金利決定会合が開かれる。7月の消費者物価指数前年比は3.7%と10年以上ぶりの高水準となったが、これは第三四半期に3.9%まで上昇するとの中銀の予想範囲内で、特段のサプライズではなかった。しかし7月雇用統計では雇用者数の伸びが減速し、デルタ株拡大懸念やサプライチェーンが圧迫されていることなどの懸念材料もあり、カナダ中銀のスタンスに変更があるかが注目される。22日にはFOMCが控えており、パウエル議長の“データ重視”との発言を受け、3日の米雇用統計には特に注目が集まっている。また米連銀総裁・要人発言に相場が大きく動かされそう。アフガニスタンでの自爆テロに対し、バイデン大統領が過激派ISへ報復攻撃を行ったことで更にテロへの警戒感が高まっている。アフガニスタン撤退後も米国は民間人支援を行うとしており、混乱は暫く続くと思われリスク回避のUSD買いが強まる可能性がある。米国がアフガニスタンに軍事行為をしたことは過去にもあったが、原油価格への影響はほとんどない。ただし、他の中東諸国の国際石油市場に影響が出た場合には価格に大きく反映するので注意が必要だ。足元では原油価格の下振れリスクが高いものの中国経済回復への期待やUSDドル安に支えられ小じっかりな動きになると予想。9月は量的緩和が暫く続くことで、USDドル安基調になると推測されるが、引き続きデルタ株拡大や緊迫化するアフガニスタン情勢、経済指標データ、米長期金利の動向などを睨みながらUSD/CADは1.2450-1.2950で推移する見込み

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』
コロナ禍にも関わらず、カナダからは1984年のLAオリンピック以来最多となる371人の選手がTokyoオリンピックに参加しました。カナダは1976年Montrealオリンピック、1988年冬季Calgaryで主催国となった際に、“金メダル獲得なし”という苦い経験をしています。(主催国で金メダルがとれなかったのはカナダだけのようです)その後、カナダの強みとなる競技への支援強化を図るなどした結果、2010年冬季Vancouverオリンピックでは14個の金メダルを獲得するまでに至りました。夏季オリンピックではイメージ通りカヌー、カヤック、ボートなどの競技を得意としています。自転車競技もなかなか強いです。カナダでは春から秋にかけてサイクリングを楽しむ人が多く見られます。道路に自転車専用のレーンも多くあり、サイクリングコースも充実。コロナ禍では運動不足を解消しようとサイクリングを始める人が増えたようで、自転車の売り上げが増加し、品薄で購入が困難になったほどです。2015年には北米で2番目となる自転車競技場がトロント郊外に建設され、トラックレースに力を入れています。今回は個人スプリントやケイリンでそれぞれ金と銅メダルを獲得。ロードレースなどではなかなかヨーロッパ勢に勝てないようですが、カナダ選手の健闘も目立ち、今後の楽しみ。今季オリンピックでは特に女性アスリートの活躍が目立ち、総合メダル獲得数24個のうち18個が女性アスリートの活躍によるものでした。水泳や柔道、女子サッカー、重量上げ、陸上などでもメダルを獲得しています。女子サッカーは20年ぶりに最強国である米国を破る快挙を果たし、カナダを盛り上げてくれました。女性陣に圧倒されたとは言え、男性アスリートも大いに活躍。最も人気、知名度があるのは、やはりアンドレ・ドグラス(Andre de Grasse)。陸上100mm走で銅、200mm走で金を獲得しました。コロナ禍での難しい状況の中、たくさんの感動があり、Tokyoオリンピックは色んな意味で忘れがたいものとなりました。

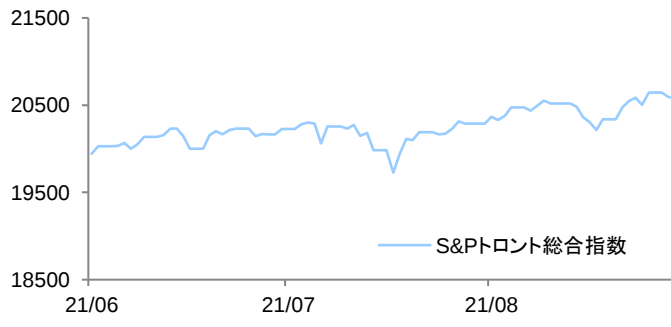
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/3	マークイットカナダ製造業PMI	7月	-	56.2	56.5
8/5	貿易収支	6月	-0.60b	3.20b	-1.58b
8/6	ネット雇用者数変化	7月	150.0k	94.0k	230.7k
8/6	失業率	7月	7.4%	7.5%	7.8%
8/16	製造業売上高	6月	2.4%	2.10%	-0.3%
8/17	住宅着工件数	7月	280.0k	272.2k	281.2k
8/18	CPI (前月比)	7月	0.3%	0.6%	0.3%
8/18	CPI (前年比)	7月	3.4%	3.7%	3.1%
8/31	GDP (前年比)	6月	8.8%	8.0%	14.6%
8/31	GDP (21年第2四半期)	2Q	2.5%	-1.1%	5.5%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1140	～	1190	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.174	～	9.704	
	JPY/KRW	10.300	～	10.900	

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

8月のドル/ウォン相場は上昇した。2日は1,152.0ウォンでオープン。米国フィラデルフィア半導体指数が節目の3,400ptを越えて上昇したことを背景に3日には韓国でも半導体株を中心に外国人投資家による株買いが入ったほか、良好な7月中国サービス業PMI(結果:54.9、予想:50.5)等を背景にドル/ウォンは下落した。6日には月安値1,140.2まで下落し、1,140割れを試す局面もあったものの、この水準では実需のドル買いが入り反発。6日海外時間に発表された米7月非農部門雇用者数(実績:943千人、予想:870千人)が良好な結果となったことを受けてドル買いとなると、韓国国内でのCOVID-19の新規感染者数が過去最多を更新したことや米インフレ指標を控えた警戒感等からドル/ウォンの下値が固くなった。さらに12日にはD-RAM単価の下落や需要鈍化を背景に、半導体業界がピークアウトすることを予想したレポートが発表されると、外国人投資家の株売りが大幅に入り、ドル/ウォンは大幅に上昇。外国人の株売り規模が過去最高となる週7兆ウォン超になると、ドル/ウォンはロスカット取引も巻き込み、13日に1,169.5ウォンまで上昇した。同日日中にはドル/ウォンの急激な動きを緩和させるため韓国銀行のドル売り介入と観測される動きもあったものの、ウォン売りの流れは変わらなかった。三連休明けの8月17日には1,166.0ウォンでオープンすると、この日も外国人投資家による韓国株式売りが大きく入り、ドル/ウォンは1,179.0まで上昇した。その後同日海外時間に発表されたFOMC議事録では、大半の参加者が経済が予想通りに改善すれば年内のテーパリング開始が望ましいとする一方、雇用については著しく前進する余地があると記載されており、市場では年内のテーパリング開始が改めて意識される格好となった。すると19日以降には外国人投資家による韓国株式売りが再び活発化し、ドル/ウォンも月高値1,181.1まで上値を更新した。20日海外時間にFED高官がテーパリングを遅らせる可能性について言及したこと等を好感しややドル売りとなったことでドル売りになると、ドル/ウォンも下落。月末の実需のウォン買いに加え、ハト派色の強いジャクソンホール講演もあり、30日にドル/ウォンは1,162.7まで下落。さらに31日には外国人投資家による株買いが入ったことでドル/ウォンは更に下落し、結局9.2ウォン上昇した、1,159.5ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

9月のドル/ウォン相場は緩やかながら上昇する展開を予想する。8月は、FEDのテーパリングを意識した動きや半導体業界の見通し懸念を受けた外国人による韓国株売りにより、ドル/ウォンは上昇した。8月26日の金融通貨委員会にてBOKは政策金利引き上げを決定するも、織り込み済みでありドル/ウォンは底堅く推移している。

今月のドル/ウォンの注目材料は以下の3つ。

①9月FOMCでのテーパリング開始の有無②韓国中銀による追加金利上げの示唆③新型コロナウイルスのデルタ変異株による影響

①8月ジャクソンホール講演では、年内でのテーパリング開始を示唆するも、現在のインフレ高進は一過性であり最大雇用達成には時間がかかるとした。また利上げ時期は、テーパリングの開始時期や速度と直接的に関係ないとの姿勢を示した。9月FOMCにてテーパリング開始が決定される可能性はあることから、確実な進展を好感し一定程度のドル買いは期待されよう。

②BOKは8月金融通貨委員会にて政策金利を引き上げ(0.50%→0.75%)。さらにBOK総裁は金融正常化の継続を明言。年内のもう1回の利上げの可能性についても示唆している。こちらは利上げの織り込みが進むにつれ、ドル/ウォン上昇を抑える要因となろう。

③コロナ変異株の感染拡大は予断を許さないものの、ワクチン追加接種への期待感等からリスクオフ材料としては限定的と見ている。ただし、通常の市場のテーマと異なり、大きく状況が悪化する可能性は否定しきれないので一定程度の注意は払っておきたい。

②はウォン買い材料ではあるものの、過去の値動きを見る限り①の要因からドル買いとなり、ドル/ウォンは上昇し続けている。9月についてもFEDによる金融政策正常化が進む限りは、ドル/ウォンは上昇し続けよう。

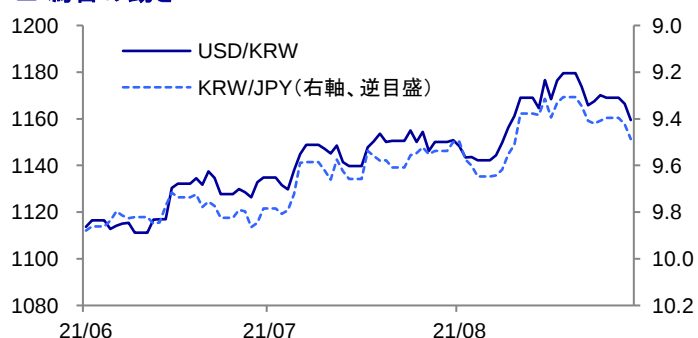
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

韓国のオリンピック事情ですが、韓国国内では東京オリンピックの結果は少し残念なものだったとの印象がもたれております。韓国の強いスポーツは、アーチェリー、フェンシング、テコンドー、野球となっておりますが、特に国技であるテコンドーで金メダルが取れなかったことは悔しい結果との論調で報道されております。一方で、若いアスリートの活躍が目立ったこともあり、3年後のパリ大会ではもう少し活躍できるのではないのでしょうか。私は韓国に来てから初めてオリンピックをTVで見ましたが、報道される競技が限られている印象を持ちました。具体的にはアーチェリーやテコンドー、バレー、野球、サッカーといった競技が韓国戦を中心に再放送されており、ほぼ全競技が放映された日本とは異なる状況でした。自国の躍進が気になるのは全ての国が同じかと思いますが、特に韓国ではテレビ放送も含めて韓国の活躍を中心に報道している印象でした。次は半年後に北京オリンピックが予定されております。韓国はスピードスケートの強豪国ですので、日韓共に全ての選手が全力を出し切り活躍することを祈っております。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	輸出(前年比)	7月	30.9%	29.6%	39.8%
8/1	輸入(前年比)	7月	44.0%	38.2%	40.7%
8/1	貿易収支	7月	\$108m	\$1,764m	\$4,483m
8/3	CPI(前年比)	7月	2.4%	2.6%	2.4%
8/11	失業率	7月	3.8%	3.3%	3.7%
8/24	消費者信頼感	8月		102.5	103.2
8/25	景況判断(製造業)	9月	-	96.0	92.0
8/25	景況判断(非製造業)	9月	-	81.0	78.0
8/31	鉱工業生産(前年比)	7月	7.2%	7.9%	11.9%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 27.50 ~ 28.10
TWD/JPY 3.90 ~ 4.00

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

8月のドル/台湾ドルは、台湾株の下落・上昇に合わせて、揉み合う展開に。

月初のドル/台湾ドルは27.980でオープン後、月初で輸出企業のドル売りは少なかったものの、台湾株の上昇と共に外資の台湾ドル買いが優勢となり、27.90付近まで下落。その後方向感なく推移したが、台湾株の上昇につられて再び台湾ドル高の流れとなると、外資の流入が続き、8/5には27.73付近まで下落したものの、一巡後は27.80付近に戻された。

月央は8/12に米7月CPIの結果を受けてドルが弱含むと27.77付近まで下落したが、台湾株がじりじりと下落する中、8/13には台湾加権指数が17,000ポイント台を割り込み、ドル/台湾ドルは27.86付近まで上昇。8/16には米8月ミシガン大消費者信頼感指数が市場予想を大幅に下回る結果を受け、ドル全面安の流れから一時27.81付近まで戻す場面もあったが、外国人投資家が株を大きく売り越していたこともあり、台湾ドル売りが優勢に。輸出企業のドル売りが上値を押さえていたものの、中国経済の減速やアフガニスタン情勢、新型コロナのデルタ株の感染拡大とリスクオフムードが漂う中、台湾株の下落が続くとドルが買われ続け、8/20には一時28.014まで上昇。

月後半になると、リスクオフムードが後退し、台湾株が反発する中、ドル/台湾ドルはじりじりと下落し、27.92付近まで下落。8/25には台湾加権指数が17,000ポイント台に戻したことや月末の輸出企業のドル売りから台湾ドルは買われ、27.90付近まで下落。その後はジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の講演を控え、様子見の動きもあり、27.92付近で推移していたが、講演の内容がハト派であったことから米長期金利が低下すると、対ドルでアジア通貨が上昇すると台湾ドル買いが優勢に。また、月末も重なったことで輸出企業のドル売りも入り、一時27.710まで下落した。

■ 今月の見通し

9月のドル/台湾ドルは台湾ドル高を見込む。

足許は引き続き、外国人投資家の動向に左右される展開が続いている。8月については中国経済への警戒、アフガニスタン情勢、コロナ感染状況等からリスクオフの流れとなり、台湾加権指数は17,000ポイントを割り、約3か月ぶりの水準まで下落し、ドル/台湾ドルもつられて28台まで上昇した場面もあった。しかし、リスクオフムードが一旦後退し、ジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の講演もハト派な内容を受け、リスクオンの流れとなり、また輸出企業のドル売りが月末の台湾ドル高をサポートした。

9月については、ジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の講演を受けて、米国のテーバリングの時期が後退するとの見方も出ており、米長期金利が低下する中、台湾ドル高となりやすいであろう。引き続き、輸出は好調であり、足許の輸出受注も7月分は前月比+21.4%と高い水準を維持しており、台湾ドル高をサポートする材料であるのは変わらないままである。

また、5月から台湾域内での新型コロナ感染拡大をしたが、外食禁止等の厳しい措置のおかげで8月には1日の感染者数も1桁台になっており、警戒レベルが1段階引き下げられた。感染拡大により、半導体関連の企業を中心に工場が停止となると輸出への影響が警戒されたが、今のところは感染は抑え込めており、急激な輸出の縮小の心配はないであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

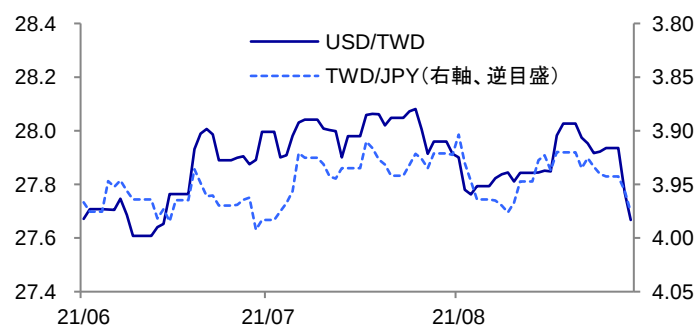
『当地のオリンピック』

当地は国土も大きくなく、バドミントンや卓球といった室内競技が人気の競技になります。その他では野球やバスケットも人気ですが、人口も少ないため、オリンピックについていえば獲得メダルが多い強豪国ではありません。コロナ禍でオリンピックが始まる前はそれほど盛り上がっていませんでしたが、今年の東京オリンピックでは過去最多のメダルラッシュとなり、大いに盛り上がりつつありました。オリンピック期間中のニュースはオリンピック一色になり、会話もオリンピックが中心でした。特に初めてバドミントンで金メダルを獲得した男子ダブルスでは、勝負を決めた最後のシャトルが着地した画面をマスクにしたり、カードにしたりと世紀の瞬間を残そうという動きがみられました。また、ダブルスで金を取ったものの、二人の出身地が異なるため、出身地の自治体の賞金金額に大きな差が出る等、メダル以外の話題でも盛り上がりました。

ただ、もう現在はオリンピックで盛り上がった熱はだいぶ冷めており、熱しやすく冷めやすいというのは日本と似ていると感じています。

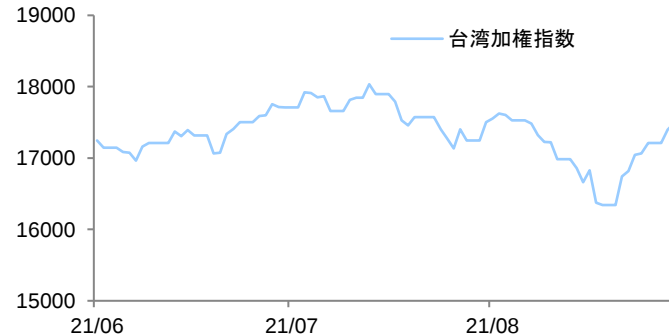
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	外貨準備高	7月	-	543.08B	543.28B
8/5	CPI(前年比)	7月	1.81%	1.95%	1.87%
8/9	輸出(前年比)	7月	33.4%	34.7%	35.1%
8/9	輸入(前年比)	7月	39.2%	41.0%	42.3%
8/9	貿易収支	7月	5.40B	5.90B	5.15B
8/13	GDP改定値	2Q	7.50%	7.43%	7.47%
8/20	輸出受注(前年比)	7月	21.5%	21.4%	31.1%
8/20	経常収支	2Q	-	28.04B	26.11B
8/23	鉱工業生産(前年比)	7月	17.60%	13.93%	18.00%
8/23	失業率	7月	4.70%	4.36%	4.76%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7700 ~ 7.8100
HKD/JPY 13.90 ~ 14.30

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【8月の香港ドル直物相場】

8月の香港ドル直物相場は、米国連邦準備理事会(FRB)の早期テーパリング観測の高まりと、中国本土や香港における株式市場の大幅下落を背景に、7.79台を超える水準まで下落。一時、18か月ぶりの安値である7.7945をつけた。中国当局による民間企業への規制強化リスクが高まっていることも影響してか、海外投資家の一部からは香港上場の中資系企業への投資を見直す声も聞こえ始めており、香港の株式市場への資金流入抑制に繋がった可能性がある。IPOマーケットも、市場心理の悪化に伴い低調に推移している。FRBが今年中にもテーパリングを開始する姿勢を見せ始めたことから、香港ドルと米ドルの金利差が拡大し、香港ドルの下押し圧力となった。一方でサポート材料となったのは、中国本土の全国人民代表大会(全人代)常務委員会における、反外国制裁法の香港適用見送りだ。同法が香港で施行されることになれば、香港の企業が外国による対中制裁との間で板挟みとなるリスクが指摘されていたものの、今回の採決見送りで一時的に懸念が和らぎ、資金流出圧力にも歯止めがかかった。また、8月下旬にHKMAが為替基金証券(EFBNs)の増発をアナウンスしたことも香港ドルをサポートし、下落幅を縮小する要因となった。

【8月の香港ドル金利市場】

HKMAのアグリゲートバランスの残高が過去最高水準の4,575億香港ドルを維持する中、香港ドルHIBOR1か月物は11年ぶりの低水準まで低下した。短期金利市場は低位安定しており、1か月物と3か月物の香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差はそれぞれ縮小した。しかし8月下旬、HKMAは今後数か月でEFBNsを400億香港ドル増発する予定をアナウンスした。これにより、4年ぶりのEFBNsによる香港ドルの過剰流動性吸収が行われることになる。米金利市場においては、FRBが今年中にテーパリングを開始する姿勢を見せ始めたことから、市場が織り込む利上げ開始時期も早まっており、米ドル5年スワップレートの上昇に繋がっている。米ドルペッグ制の下、香港ドルスワップレートについても米金利に追随して上昇する動きが見られる。香港ドル短期金利は低水準で推移している中、企業による金利上昇リスクに対するヘッジニーズも高まったことから、香港ドル長短金利差(3か月物HIBOR－3年物スワップレート)は7月末の-0.27%から-0.40%までマイナス幅を拡大させた。

■ 今月の見通し

【9月の香港ドル直物相場】

9月の香港ドル直物相場は、7.78から7.81のレンジ内での推移を予想する。FRBによるテーパリング開始時期が近づいていることに加え、中国当局による民間企業への規制強化リスクも高まっている。これらが引き続き下押し圧力となり、香港ドルは7.80台を試す展開となるだろう。ただ、2013年のテーパタントラムの経験則からしても、米金利がテーパリング期待により上昇する局面では香港ドル金利も追従して動くことが予想される為、為替市場において香港ドルが一方的に売られるとは考えにくい。ペッグ制の下限である7.85まで下落することはないと考えている。加えて我々は、HKMAによる流動性吸収措置が香港ドルと米ドルの金利差拡大を抑え、為替市場での香港ドルの下落幅を緩やかなものにすると考えている。また全人代常務委員会において反外国制裁法の香港適用が見送られたことも安心材料となり、投資家懸念は一時的に和らいでいる模様。しかしながら、同法の香港適用は一時的に見送られただけであり、引き続き審議が継続する見通しだ。米中の対立姿勢が高まる中、香港においてビジネスを行うことのリスクを浮き彫りにした事象であり、海外からの投資や資本流入が促進される局面ではない。現在の香港ドル直物相場は、下押し圧力の方が強いと言えるだろう。

【9月の香港ドル金利市場】

HKMAがEFBNsの増発予定をアナウンスしたにも関わらず、香港ドルの短期金利は引き続き低位で推移している。今後増発されたEFBNsにより約400億香港ドルの流動性が市場から吸収されたとしても、アグリゲートバランスの残高は4,000億香港ドル以上と、未だ潤沢な水準に留まると見込まれる。潤沢な流動性を背景に、通常想定される四半期末における香港ドル短期金利の上昇も小幅なものになると想定されている。また、直近の香港株式市場の下落や中資系企業への投資手控えの動きから、IPOの動きも引き続き低調なものになるだろう。IPOに基づく資金需要により金利が変動する可能性は低い。一方で長期金利については、米国においてFRBが年内のテーパリング開始に向けて準備を進めており、今後米国の利上げ開始時期の観測が前倒しされれば、米ドルペッグ制の下、香港ドルスワップ金利にも上昇圧力がかかるだろう。

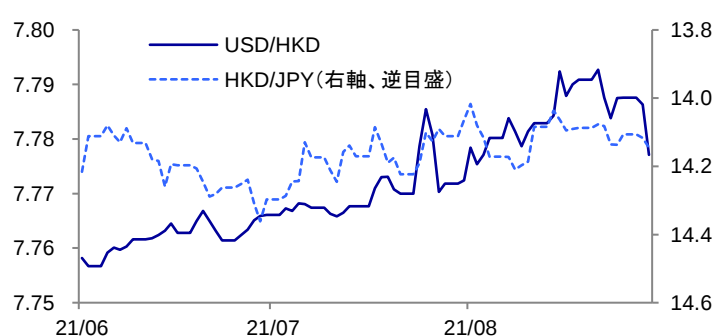
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『香港のオリンピック事情』

今年の東京オリンピックは、香港でも大きく注目されました。男子フェンシングフルーレ個人種目において、香港の張家朗選手が金メダルを獲得したのです。香港の金メダル獲得は1996年以来25年ぶりの快挙でした。最終的に香港は今回の大会で、金メダル1個・銀メダル2個・銅メダル3個と史上最多数のメダルを獲得しており、素晴らしい結果を残すことができました。選手達の素晴らしいパフォーマンスはもちろんですが、今回の大会では、政府が香港域内でのテレビ放映権を購入していた為、香港のテレビチャンネルにおいて無料で見る事ができたのも、人々を夢中にさせた理由の一つです。選手達を応援しようとする機運も非常に高く、ショッピングモールの大きなモニター画面等、屋外のパブリックビューイングにて観戦する人もいました。その為オリンピック期間中は、外を歩いていると色々な所で大きな声援が聞こえてきました。

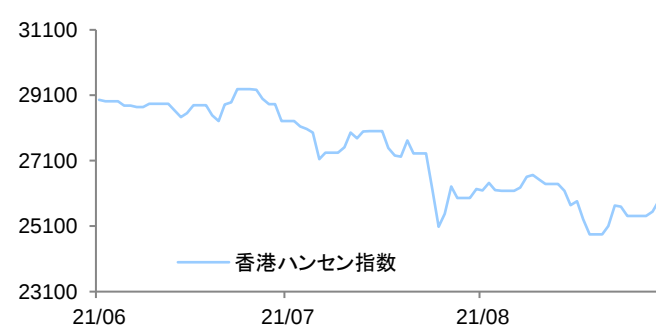
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/30	GDP(前年比)	2Q A	7.8%	7.5%	7.9%
8/2	小売売上高(価額、前年比)	6月	14.1%	5.8%	10.4%
8/4	日経香港PMI	7月	-	51.3	51.4
8/6	外貨準備高	7月	-	\$494.8b	491.6b
8/13	GDP(前年比)	2Q F	7.5%	7.6%	7.5%
8/18	失業率(季調済)	7月	5.3%	5.0%	5.5%
8/19	CPIコンポジット(前年比)	2Q F	3.7%	3.7%	0.7%
8/26	輸出(前年比)	7月	26.8%	26.9%	33.0%
8/26	輸入(前年比)	7月	26.9%	26.1%	31.9%
8/26	貿易収支(HKD)	7月	-34.8b	-35.0b	-40.5b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.4000 ~ 6.6000
CNY/JPY 16.50 ~ 17.70
100JPY/CNY 5.6000 ~ 6.1000

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

8月のドル人民元為替相場(USDCNY)は行って来いの展開。

2日、USDCNYは6.46台後半でオープン。3日夜、リスクオフのドル買いから6.47台へ上昇。4日夜、米ADP雇用統計の弱い結果を受けて6.45台後半まで下落した直後、クラリダFRB副議長の「利上げに必要な条件は22年末までに達成されるだろう」等の発言を受けて反発し、同日の下げを打ち消した。6日、米雇用統計の強い結果を受けて6.48台後半まで上昇。

9日、6.48台前半でオープン。オープン直後は6日の上昇に対する反動が見られたが、米金利の上昇が継続したことや中国における新型コロナ感染拡大を背景に6.48台後半で底堅い動きが続いた。11日公表の7月米CPIでは、インフレ上昇圧力にピークアウトの兆しが確認できたことで、発表後の米金利低下から一時6.47台半ばまで下落。

16日、6.47台前半でオープン。中国主要統計の軟調な結果を受けて小幅に元安方向へ反応。17日午後に入り中国株の下落を横目に元売りが優勢となり6.48台を推移。18日夜に公表されたFOMC議事録では、年内に債券購入ペース減速(テーパリング)を開始し得ると示された一方で、開始時期やペースについてはまだ見解が一致していないことが判明したことから、相場水準を変えるには至らなかった。19日、中国株が再び下落する展開にUSDCNYは6.49台後半まで上昇、20日には6.50台を付けた。

23日、6.49台前半でオープン。下落が続いていた中国株が反転上昇していたことや、米金利が低位で推移していたことを受け、USDCNYは元買いが優勢となり24日夜間には6.47レベルを下回った。その後、3営業日続伸した上海総合指数に調整が入り反転下落。USDCNYも元安に推移し、26日には6.48台前半へ上昇。27日夜、ジャクソンホール会合でパウエル議長が講演した内容に早期テーパリング開始の明確なシグナルが見当たらなかったことからドル売りが進み、翌30日には6.46台後半を示現。

■ 今月の見通し

9月のUSDCNYは上昇圧力の高まる展開を予想。

米国では7月FOMCの議事録やジャクソンホール会合でのパウエル議長講演から、年内のテーパリング開始を支持する参加者が多いことが明らかとなった。パウエル議長のスタンスこそハト派的であるものの、早期のテーパリングを支持する参加者も多く、9月会合でテーパリングを決定する可能性も留意しておきたい。他、9月の会合ではドットチャートの公表もあり、雇用の指標が回復しつつある中で2022年の利上げを予想するメンバーが増えるようであれば、ドル高が一気に進むと予想する。

一方、中国では引き続き規制リスクが意識されており、海外投資家の証券投資フロー流入が弱まっている。また、7月の預金準備率引き下げ以降、PBoCの緩和的な姿勢は継続している。これらはいずれも元安材料となっている。

中国経済についても一進一退の内容が続いており、PBoCの金融緩和スタンスから見られるように下半期の経済見通しは上半期に比べ足踏みするとの見方が多い。

6月後半から6.45-6.50でのレンジ取引が続いているが、元売り要因が意識され、どちらかといえば上昇圧力が高まっている状況。これまで6.50を抜けてもすぐにレンジ内に戻っていたが、米国の金融政策正常化を意識したドル買いによってレンジを上抜けする可能性には警戒しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

中国では、半年後の2022年冬到北京オリンピックを控えており、東京オリンピックが開幕するまでは、正直、北京オリンピックへの関心度の方が高かったように思います。

しかしながら一転して、東京オリンピック開催後は中国国内でもかなり盛り上がっていました。

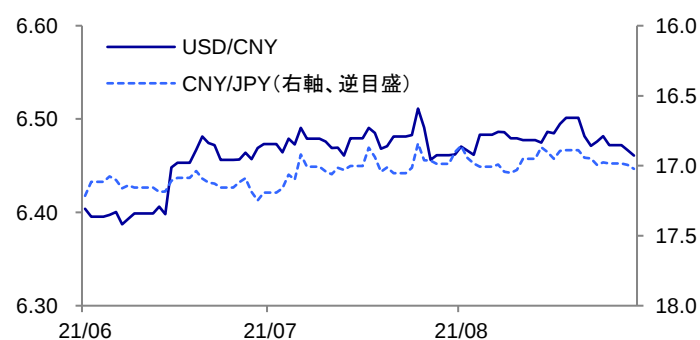
中国の国営テレビCCTVでは普段スポーツを報道するチャンネルで24時間オリンピックの放送をしていましたし、SNSでもかなり賑わっていました。当チームのスタッフで、中国選手の赤とオレンジ色のマスクを着けている方もいました。

中国は米国に次ぐメダルの獲得個数であったこともありいろいろな種目に注目が集まっていましたが、やはり卓球への注目度は高かったように思います。私は卓球混合の決勝戦を飲食店のテレビで観戦していたのですが、水谷選手と伊藤選手が中国の許選手と劉選手に接戦の末、逆転勝ちした時、店員さんが「ありえない……」と絶句していたのがとても印象的でした。

東京オリンピックが終わり、中国国内の注目は再び北京オリンピックへ戻りつつあります。東京オリンピックでのコロナ感染対策への関心も高く、東京大会を参考にしながら北京オリンピックの準備が進められていくそうです。

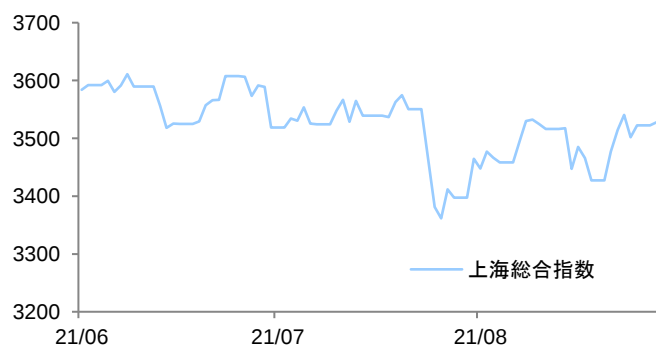
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/31	非製造業PMI	7月	53.3	53.3	53.5
7/31	製造業PMI	7月	50.8	50.4	50.9
8/2	財新・製造業PMI	7月	51.0	50.3	51.3
8/4	財新・サービス業PMI	7月	50.5	54.9	50.3
8/7	貿易収支(年初来)	7月	53.3b	56.6b	\$51.5b
8/9	CPI(前年比)	7月	0.8%	1.0%	1.1%
8/9	PPI(前年比)	7月	8.8%	9.0%	8.8%
8/16	鉱工業生産(年初来/前年比)	7月	14.6%	14.4%	15.9%
8/16	小売売上高(年初来/前年比)	7月	21.2%	20.7%	23.0%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3300 ~ 1.3700
SGD/JPY 81.00 ~ 83.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2021年08月のシンガポールドル(SGD)相場は小幅にSGD高が進行。

月初のUSD/SGDは1.35台半ばの水準で推移。月初発表の米経済指標が軟調な結果を示す中、米金利低下とUSD安が進んだ。USD/SGDはSGD高がじりじりと進み、6日にかけて1.34台後半の水準まで下落。

その後USD/SGDは反転。注目の米雇用統計では良好な結果が示され、米金利は一転上昇傾向に。USDもそれに追随するように買われ、二週目にかけてUSD/SGDは1.36台半ばの水準までSGD安が進行した。しかし米8月ミシガン大学消費者マインドの大幅悪化を受けて再び米金利が低下すると、USDは軟調推移となり、月半ばのUSD/SGDはやや水準を落とし1.35台後半の水準での狭いレンジ内推移となった。

20日にかけてのUSD/SGDはSGD安が進行。FOMC議事要旨公表後もUSDは底堅さを維持しており、FRBの年内テーパリング開始の可能性や中国の景気減速への懸念の高まりなどを背景にSGDは軟調に推移。USD/SGDは20日にかけて1.36台半ばの水準までUSD高が進行し、月中高値を更新した。

23日以降、月末にかけてSGDは反転。米国におけるワクチンの正式承認や米株高を受けて市場がリスクオンムードとなる中、アジア通貨は堅調推移となった。タイのコロナ新規感染者数が減少傾向にあることも追い風となった。その後は27日のジャクソンホール会議を控え様子見ムードが広がり、アジア通貨高の流れが一時後退するも、ジャクソンホール会議にてパウエル議長より「現時点で必ずしも年内のテーパリング開始が適切と考えていない」といった趣旨のコメントが示されると、市場はこれをハト派寄りなコメントと解釈。米金利低下及びUSD安に繋がると、市場はこれをハト派寄りなコメントと解釈。米金利低下及びUSD安に繋がると、市場はこれをハト派寄りなコメントと解釈。米金利低下及びUSD安に繋がると、市場はこれをハト派寄りなコメントと解釈。

■ 今月の見通し

2021年09月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安の進行を予想。

足元のSGDは引き続きUSD及び人民元由来の要因に左右される趣が強い。米国発のテーパリング関連報道において、その期待感が残り続ける以上、米金利・USD共に上昇傾向を維持すると予想されることから、9月のSGDはUSDに対し軟調推移となる展開を予想する。

8月、BOKが市場予想に反し利上げを実施。コロナ感染者数が増加している中でのサプライズ利上げとなったが、インフレ抑制を目的とした利上げ実施の背景であると説明された。そうした理由が金融引き締め理由となるのであれば、シンガポールは既に国内のコロナ新規感染者数の抑制に成功しており、ワクチン接種の進捗も順調。各種経済指標も強い結果を示しており、韓国対比で状況は明らかに改善している。ゆえに、次回MAS会合(10月)においてBOKと同様に金融政策の変更(金融引き締め方向へ調整)を実施するのではないかと見方があり、SGDは強含む可能性も残る。

しかし、当地の金融政策手段の手段は「金利」ではなく「為替」である。仮に10月のMAS会合にて金融引き締めが実施されるにしても、過度な調整は実勢相場への影響が強すぎるため、通貨バスケット内の構成通貨に対しわずかにバンドの向きを変える(ややSGD高方向に調整)程度の軽微な変更に限るだろう。それであれば、現時点で既にNEERバンドの上限近くで推移しているSGDの上昇余地は乏しく(当部モデルによれば、SGDはNEERバンドの上限200bpに対し、既に中央値から100-120bp高い水準で推移しており、SGDの上昇余地は限定的)、BOKに連れ金融引き締めが行われたとしても、強いSGD高材料とはなり得ないだろう。

よって、SGDは引き続き、シンガポール由来の要因より、現実味を帯び始めている米国の利上げ動向、並びに中国の規制強化等に左右される展開を予想する。中国の規制強化に関する報道は引き続き予断を許さないものの、内容の具体性・実体経済への影響度合いは不透明であることから、足元はまず米国の動向を注視すべきであろう。

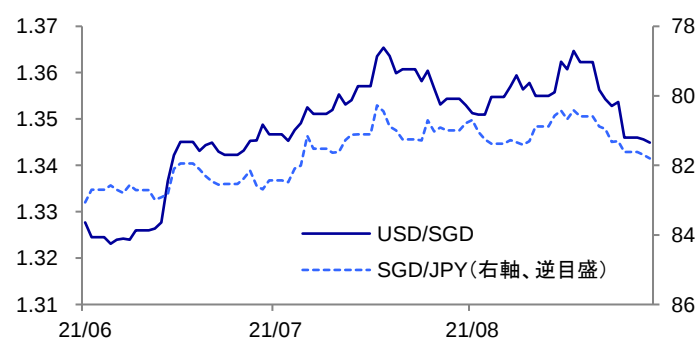
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』
当地のオリンピック観戦が盛り上がっていたか否か。この二択で判断するのであれば、間違いなく盛り上がってはいなかった。コロナ禍における行動規制(Phase2 HAと呼称)により街には人がおらず、バーで様々な国の面々と交流しながら応援に華を咲かせる、といった過去の日常は皆無。また、自国選手の少なさからか、チームメンバーがこの話題で盛り上がることはまず無く、時折オリンピックの様子をモニターで流すも、注目競技については放映権の高騰からか、地場局が流す競技はなかなかに玄人向けのものだけであった。そんなシンガポールにも、過去に金メダルを取得した選手がいる。ジョセフ・スターリング選手だ。リオ五輪の水泳にてマイケル・フェルプス選手を下し金メダルを獲得した。当地史上初の金メダル獲得であり、当時は大変な盛り上がりだったという。しかし、そんな歴史的偉業を成し遂げた選手であろうとも、兵役義務からは除外されなかった。アスリートのピークと言える年齢で兵役を経なければいけない選手の心の中は如何なるものか。知る由もないが、今回のオリンピックでは、当時のような華々しい結果を残すことは出来なかったようだ。そういえば、筆者の知人に韓国のテニス選手が居る。彼は全日本テニス選手権大会へ遠征し準優勝を成し遂げた。期間限定かもしれないが、この実績により兵役を免除されていた。制度は国毎に違いがあるとはいえ、アスリート人生における影響を慮れば、当地の運営が如何に厳格であるかを思い知らされた次第である。

(アジア・オセアニア資金部 成田隼基)

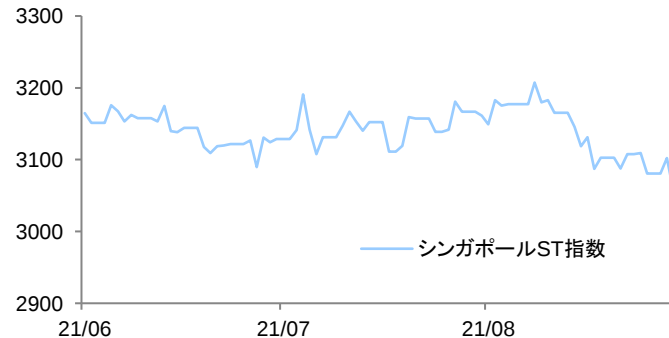
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	購買部景気指数	7月	50.8	51	50.8
8/5	小売売上高(前年比)	6月	25.8%	79.7%	79.9%
8/11	GDP(速報値)	2Q F	14.2%	14.7%	14.7%
8/17	非石油地場輸出(前年比)	7月	12.0%	12.7%	15.9%
8/23	CPI(前年比)	7月	2.5%	2.5%	2.4%
8/26	鉱工業生産(前年比)	7月	19.9%	16.3%	28.0%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.00 ~ 33.00
THB/JPY 3.30 ~ 3.45

アジア・オセアニア資金部 パンコック室 山崎浩幸

■ 先月の為替相場

8月のドルパーツは32.95近辺でスタート。7月の後半から再びロックダウンを開始するもコロナ感染拡大が継続する中、ロックダウンの対象となる県を29県へ拡大することが決定されるも、増加に歯止めがかからずパーツ軟調の流れが継続していた。3日、翌4日にタイ中銀の会合を控える中、政策金利の引き下げを望むエコノミストも多く、また近々新規感染者数が2万人を超えるだろうとの見通しがパーツ売りを加速し2020年4月以来となる33台を突破した。翌4日には、タイ中銀のMPCで政策金利の現状維持10会合連続で決定。ところが委員7人のうち欠席1人を除き2人が0.25%の引き下げに投票する等、前回までの全会一致でなかったことからパーツ売り圧力に繋がりが6日にかけて33.40台まで上昇した。

週明け9日は33.40近辺でスタート。10日にかけて、新規コロナ感染者数は20,000人近辺での推移が継続する中、33.50を目前に上値の重い展開が続いた。11日には、33.50の突破に失敗したことから、一旦は利食い等が入り下落。海外時間には米7月CPIが概ね予想通りの結果となり、FRBの金融引き締め観測が後退したことも要因となり下げ幅を拡大。タイ休日であった翌12日は流動性の乏しい中で一時的に33.00を割込んだ。ところが翌日はオープンから上昇に転じ、12日に発表となった米物価関連指標をうけた米金利上昇が材料視され、タイ時間クローズにかけて33.30台を回復。16日には、タイ中銀のセタブット総裁は政府の1兆パーツ規模の追加財政支出の必要性や、新型コロナの経済への打撃は1997年のアジア通貨危機より深刻との認識が示された他、政府からロックダウンを8月末まで延長するとのアナウンスが材料となり、パーツ軟調となり33.40を再び突破。その後、22日まで33.30台後半での値動きが継続し、タイのコロナ感染状況や米国を始めたとした先進国でのデルタ株の脅威の広がり、アフガン情勢を中心とした地政学リスクの高まり等、一進一退の状況が続いた。ところが、23日に、タイの新規コロナ感染者数が2万人を下回り始めたことでセンチメントが改善すると、海外時間では対主要通貨に対してドルが売られる状況に対パーツに対してはドル売りが優勢となり33.25近辺まで低下。翌24日から25日にかけては新規コロナ感染者数が2万人割れを継続しており、回復者数が新規感染者数を上回っていること等が注目され9月からロックダウンの一部緩和に対する期待が高まったことから、ドルパーツは大きく下落、25日には一時32.70付近まで急落した。さらに月末付近には米利上げに関して米パウエル議長のハト派的なスタンスからドルが売られる展開に、32.50台へと下げ幅を拡大していった。

■ 今月の見通し

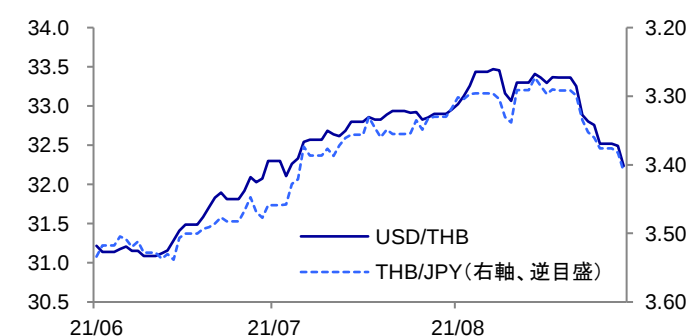
9月のドルパーツは、パーツ高の流れは小康状態となり、32-33台でのレンジ推移を予想。8月下旬のドルパーツの急落により一気に7月上旬のレベルまで値を戻している。足許、1日あたりの新規感染者数は2万人を割込み、7月後半から開始したロックダウンの効果も一定程度出ているといえる。また、一旦は新規感染者数が回復者数を下回ることとなり医療崩壊の危機も後退するに及び、状況は確実に改善していることが窺える。加えて、9月1日よりロックダウンの一部緩和についても既にアナウンスされており、閉鎖されていた一部の店舗の営業が再開される運びとなっている。それでも、状況は7月に始まったロックダウン開始前の状況に比べれば、まだまだ悪い状況であり、その水準よりもさらに良い状況になるかどうかは、このロックダウンの緩和後の結果如何であるといえよう。既に、開始前からその運用方法において、議論が行われており一部では実施不可能であるという声も聞かれるほどであり、スタートしてみないとどのように緩和が実施されていくのかが不透明であることも事実である。しかしながら、今回の緩和により、ワクチン接種がより加速していくことも期待されることから、その動静には注意していきたい。一方で、米国のデーバリング、利上げ開始時期について、昨今の米経済指標をみるにつれて、ややその早期実施への期待感が後退しているようにも写り、その点、ドルパーツの下落を加速させる要因の一つとなっていると考えている。9月米雇用統計は一つの試金石となりうることから、米経済指標やFOMCの動向にも注意が必要である。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

「当地のオリンピック事情」
当地でのオリンピックは日本ほど盛り上がりません。東京開催だから、日本で盛り上がりつつあるのは当たり前ということなのですが、東京開催でなくとも日本では注目イベントであることは間違いないと思いますが、日本開催ではない時に比べても盛り上がりません。2016年の時はバレーボールが注目され、重量級で金メダルをとったり、今回はテコンドーで金、ボクシングで銅とやはり格闘技系は強いということなのですが、あまり話題になっていないように思います。遡ること1996年のアトランタ五輪でボクシング男子フェザー級でタイ史上初の金メダルを獲得したソムラックカムシンがタイにおけるオリンピックとしては有名な人物だと思います。一方で、オリンピックよりも当地で話題を集めるスポーツ大会に”Asian Games”があります。この大会はアジアオリンピック評議会が主催するため、アジア版オリンピックとも言われている大会です。過去4回、本大会がバンコックで開催されている等、タイにとってはなじみの深い大会となっているようです。

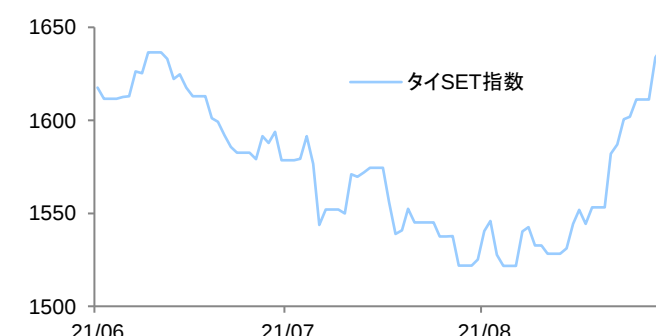
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	製造業PMI	7月	-	48.7	49.5
8/4	タイ中銀政策決定会合	8/4	0.50%	0.50%	0.50%
8/5	CPI (前年比)	7月	0.88%	0.45%	1.25%
8/5	CPI Core (前年比)	7月	0.21%	0.14%	0.52%
8/5	消費者信頼感指数	7月	-	35.3	37.3
8/16	GDP(年率)	2Q	6.60%	7.50%	-2.60%
8/23	輸出(税関ベース)	7月	19.70%	20.27%	43.82%
8/23	輸入(税関ベース)	7月	40.65%	45.94%	53.75%
8/23	貿易収支	7月	\$900M	\$183M	\$945M
8/25	自動車販売件数	7月	-	52,442	61,758

マレーシアリング相場

予想レンジ:

USD/MYR	4.13	～	4.23
MYR/JPY	25.97	～	26.66
JPY/MYR	3.750	～	3.850

マレーシアみずほ銀行 内田 星

■ 先月の為替相場

8月のリングギット市場は中旬まで動意薄だったが、21日新首相就任後、下旬にかけてリングギットは反転上昇。前月比でもややリングギット高の水準で引けた。

上旬は、米金利低下し10年債利回りが4日に1.12台を付けるなどリングギットにとって外部環境は追い風だったが、国内政局不安も重なりリングギット上昇とならず。2日の特別議会最終日はコロナ感染を理由に無期限延期。野党側の反発が強まる中、3日にはムヒディン首相が一転して勅令撤回の手続き未完了を認めると、最大与党UMNOのザヒド総裁が最高評議会を経て、所属議員11名のムヒディン首相不支持を表明。ムヒディン首相支持の過半数割れを国王宛に書面で提出するなど、ムヒディン首相は窮地に追い込まれた。また、6日発表の米7月雇用統計が市場予想を上回りテーパリング開始に向けた大きな進展と捉えられると、米金利は反転し、その後10年債利回りで1.37%まで上昇。リングギットにとっては重しとなった。

中旬にかけては、月中安値圏での4.24を挟んでの小幅レンジ推移となった。13日に発表された第二四半期GDPは、前年比+16.1%と市場予想を上回る結果となったものの、前期比▲2.0%の結果を踏まえると楽観できる内容とはならずフルロックダウンによる国内経済への影響が深刻化していることを示す結果となった。また、同日マレーシア中銀が21年GDP成長見通しを大幅に下方修正(+6.0-7.5%から+3.0-4.0%)。想定されていた下方修正であったものの、リングギット相場には重しとなった。16日には窮地に立たされていたムヒディン首相が辞任を発表。ただ、市場反応は限定的で市場の関心は次期首相と閣僚メンバー選定へ移った。

下旬にかけては、リングギット買戻しが入った。26日に節目の4.20を割ると、一時4.19まで下落。リングギットは久しぶりに底堅さを見せた。21日にイスMAILサブリ氏が下院議員114名の支持を得て新首相の座を射止めた。就任後の足取りは、翌22日にテレビ演説を行い、超党派での議論参加を呼びかけた。25日には野党幹部と会談し、新型コロナ対策の与野党協力の合意を取り付けた。この与野党合意は、アブドラ国王が17日に各党代表を王宮へ招いて釘を刺していたこともあり、合意自体は特段サプライズではなかったものの、新首相就任による政局安定化を期待したリングギット買いで反応した。

■ 今月の見通し

今月のリングギット相場は、先月21日に就任したイスMAILサブリ新首相の政権手腕と米市場動向を注視していきたい。

今月一番の注目はやはり3日発表の米8月雇用統計。先月の同統計をこなし、テーパリング開始の判断基準として残されていた雇用環境の改善は達成しつつある状況が大方のコンセンサスであり、3日の発表で年内テーパリング開始の駄目押しとなろう。一方、テーパリング開始後のマーケット動向にも注目である。過去の例を見ると、2014年1月から開始されたテーパリングでは、当時のバーナンキFRB議長が8か月前の2013年5月に突如テーパリングを示唆した直後から米金利は急騰。ドル上昇に繋がった。然しながら、実際テーパリングが実施された時期を見ていくと、ドル金利は2014年1月を天井として以降実施期間10月まで低下の一途を辿った。通貨ドルもその期間軟調に推移している。過去の例がそのまま適用できる訳ではないが、参考材料として今後の相場を見ると、ドル上昇は既に終焉を向かえようとしている可能性はある。

また、先月誕生した新首相であるが、最大与党UMNOより擁立された前副首相であり、支持基盤が引き続き不安定な点は前政権と特に変わらない。アブドラ国王からは6日より開催する通常国会で信任投票を得る様、釘を刺されている。ここで不信任となるリスクは低い一方、早くもムヒディン首相から閣僚メンバーに対して横槍が入る状況であり、政権運営は一筋縄では行かないだろう。掛かる状況下、来月末には22年度の予算発表が控えており、アブドラ国王が期待する挙国一致での難局突破をいかに果たしていくかイスMAILサブリ氏の手腕が試される。21日就任後の動きは市場でも好感されリングギットは反転買戻しの兆しを見せている様に見えるが、所謂ご祝儀相場であり、暫くは油断禁物だ。

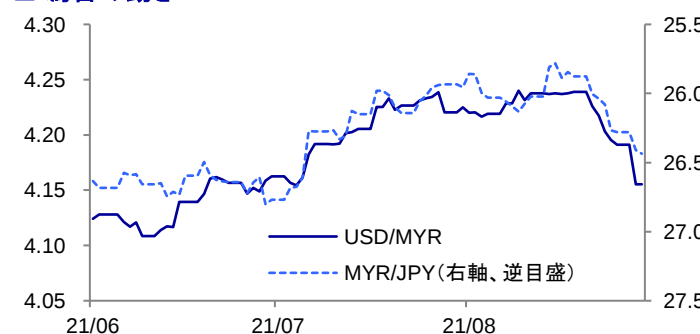
上記、国内政治動向とドル市場を踏まえ、先月最終週のリングギット相場を見ると、リングギット下落トレンドからの転換時期に向かっていると考えるのは、メインシナリオとは言えないものの、可能性はゼロではないと言えそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』
マレーシアで最もメダルが期待されるスポーツと言え、バドミントンでしょう。多民族国家である当地においては民族によって好きなスポーツは違うため、サッカー・水泳・バスケット・クリケット様々なスポーツが盛んです。一方、バドミントンだけは、皆大好き、老若男女夢中になるスポーツです。マレーシアの国技はバドミントンと言われており、近くの体育館に行けば必ずバドミントンコートはあるという過言ではありませんし、プロリーグも開催されているほどです。嘗ては世界ランキング1位の選手もいて、過去のオリンピックでもバドミントンだけはメダルを複数回獲得している等、当地に根ざした唯一無二のスポーツなのです。日本の多くの方が想像するバドミントン選手と言えば、やはり桃田選手ではないでしょうか。桃田選手は2019年に当地で開催されたマレーシア・マスターズで交通事故に巻き込まれて大怪我を負いましたが、お見舞いにはマハティール首相(当時)の奥様や閣僚が駆けつけるほどの国賓級の待遇を受けました。当地においても、最も有名な日本人スポーツ選手は「MOMOTA」と言っても過言でないくらい、皆知っている有名人です。そんな「MOMOTA」のオリンピック試合ですが、残念ながらまさかの予選敗退。マレーシア人からも、「あのMOMOTAが・・・」と、驚きの声が聞こえてきました。さて、そんなマレーシアですが、東京オリンピックでは、バドミントン・男子ダブルスで銅メダルという結果に終わっています。まだバドミントンでの金メダルも、残念ながら夏季オリンピック自体での金メダルも無い、マレーシア。一番金メダルに近いスポーツとして、次回パリではきつと熾烈なメダル争いを繰り広げてくれることでしょう。

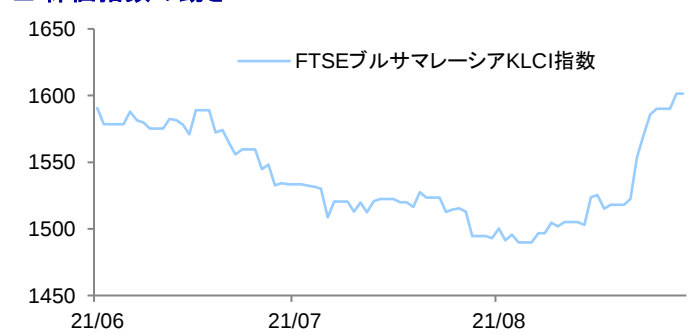
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/6	Foreign Reserves	7/30		\$111.1B	\$111.1B
8/9	Industrial Production	7月	-1.0%	1.4%	26.1%
8/13	GDP (QoQ)	2Q	-1.9%	-2.0%	2.7%
8/13	GDP (YoY)	2Q	14.1%	16.1%	-0.5%
8/13	Current Acc. Bal.	2Q	10.5B	14.4B	12.3B
8/20	Foreign Reserves	8/13		\$111.3B	\$111.1B
8/25	CPI YoY	7月	2.9%	2.2%	3.4%
8/27	Exports YoY	7月	9.9%	5.0%	27.2%
8/27	Imports YoY	7月	20.1%	24.0%	32.1%
8/27	Trade Balance MYR	7月	20.50B	13.68B	22.24B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14200 ~ 14600
IDR/JPY 0.75 ~ 0.78
JPY/IDR 128.21 ~ 133.33

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

8月のドルルピアは、方向感無く推移した。ドルルピアは月初2日、14400台後半でオープン。この日発表された7月のインドネシア消費者物価指数は前年同月比プラスの1.52%と市場予想及び前月の結果を上回り、ルピアをサポート。加えてインドネシアのコロナウィルス感染拡大の状況も最悪期を脱したとの見方もあり、4日にかけて14300近辺までルピアは上昇した。5日にはインドネシアの第2四半期GDP成長率が発表され、前年同期比で7.07%増と増加幅は市場予想を超えるものとなるも、週末6日に発表される米7月雇用統計待ちのムードの中、ルピアへの影響は限定的に留まった。発表された米7月雇用統計は、良好な内容となり、米長期金利が上昇する中、翌週10日には14400台へとルピアは押し戻された。その後は材料難の中、14400を挟んで横ばいで推移した。月後半に入り14400近辺での推移が続いていたドルルピアだが、18日のFOMC議事録公表により量的緩和縮小、所謂テーパリングへの思惑が膨らみ、翌19日のドルルピアはじわりと上昇(ルピアは下落)した。同日のインドネシア中銀政策決定会合は、市場予想通り7日物リバースレポ金利は3.50%で据え置かれ、為替への影響は限定的に留まった。翌20日は、コロナウィルスの感染拡大がグローバルに懸念されリスクオフムードの中、インドネシア第2四半期の経常赤字は、前四半期の11億米ドルから22億米ドルへと大幅に拡大し、事前予想を上回ったこともありルピアは続落。14500手前まで下落した。翌週23日、インドネシア中銀が、財務省との新たな協定の下で今年と来年、最大439兆ルピア(304億6000万ドル)の国債を直接引き受けることを発表するも昨年の時点で予告があったことと金額規模も昨年と同程度であったこと等から、特段材料視はされず、ルピアへの影響は限定的に留まった。24日には24日にインドネシア政府が新型コロナウイルス流行に伴う一部の制限措置の緩和を決めたことで、一時14400を割り込みルピアが強含む場面も見られた。27日、注目のジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演内容は目新しいことは無く、米金利低下、ドル安の流れとなり、翌週初30日のルピアも一時14300台半ばまでルピア高が進んだ。(30日終値時点)

■ 今月の見通し

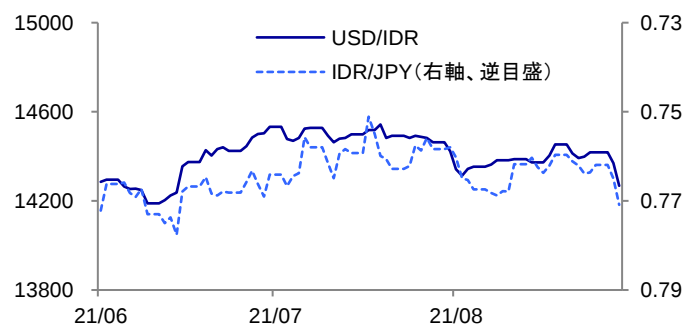
9月のドルルピアは、横ばいでの推移を予想する。6月以降、米金融政策について早期の量的緩和の縮小と利上げ時期の前倒しが意識されることがルピアの重石となっていたが、ジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演を経て、一部に期待されていた利上げ開始の前倒し観測は後退したこともあり、短期的にはルピアの安定に寄与するだろう。勿論長期的には、米利上げ時期が近づいていく中、ルピアにとって苦しい時間帯が徐々に近づいてきているということには変わりがないが。また、インドネシアにおけるコロナウィルス感染拡大状況が最悪期を脱したこともルピアにとっては好材料となる。一方でインドネシア中央銀行のペリー総裁は先月2日、最近の新型コロナウイルス感染拡大の影響で、インフレ圧力が生じるのは2022年終盤に後ずれするとの見通しを示し、インフレ圧力が生じるまで政策金利は上げられないとの認識を示した。コロナウィルスの感染状況を見通すことは不可能である為、物価の動向についても不透明感是否めないものの、米国に比べて景気回復が遅れる可能性が高い中、インドネシア中銀が今後の金融政策運営に苦労を強いられることは間違いなさそうだ。ルピアのサポート材料となっているインドネシア貿易収支は7月の黒字額が6月から再び増加した。コロナウィルス感染拡大のあおりを受けた格好で輸出入ともに前月からは落ち込み、特に輸入の落ち込みが目立つ格好となり、黒字額が増加した。最近では輸入の回復を伴って貿易黒字が縮小する傾向となっていたが、一旦コロナウィルス感染拡大により足止めされた。だが、中長期的には貿易収支黒字は縮む方向となる可能性は否めず、経常赤字拡大はルピアにとって懸念材料の一つだ。長期的には不安材料が散見されるも、今は、米金利が低水準に抑えられることで、ドルルピアのルピア安再開はもう少し先となりそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

大変恐縮なのですが、諸般の事情により、暫くの間休載とさせていただきます。

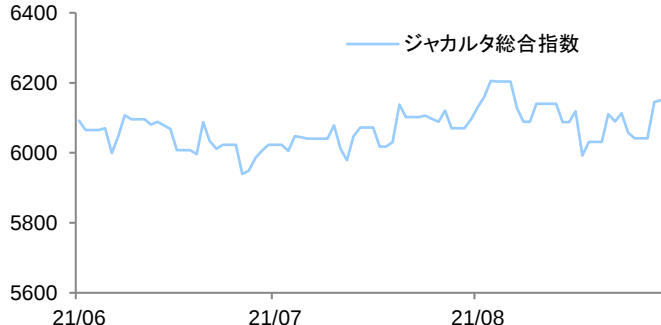
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	CPI(前年同月比)	7月	1.47%	1.52%	1.33%
8/18	貿易収支(USD M)	7月	2315	2589	1324
8/18	輸出(前年比)	7月	35.94%	29.32%	54.43%
8/18	輸入(前年比)	7月	53.50%	44.44%	60.12%
8/19	BI 7days リバースレポ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

(資料) ブルームバーク

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 49.50 ~ 51.00
JPY/PHP 2.155 ~ 2.220

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榊 雄一郎

■ 先月の為替相場

8月のドルペソ為替相場はフィリピン国内におけるデルタ株感染拡大を受けた外出・移動制限の厳格化から下落となったが、その後の制限緩和や株価上昇を受けてペソ上昇となり、行ってきた展開。

フィリピン政府から8月6日よりマニラ首都圏で現在の外出移動制限を4段階で3番目に厳しい措置から最も厳しい措置に移行することが発表されたことを受け、経済活動の低迷に伴う輸入減少によるドル買い需要減退観測からペソは約1か月ぶりとなる1米ドル＝49.590まで上昇する局面が見られた。しかしながら、FRBクラリダ副議長のタカ派発言を受け、アジア通貨が弱含んだほか、外出・移動制限の最厳格化を控えて、預金準備率引き下げの思惑から、ペソは急落し、6日には2013年6月以来となる1日の下げ幅を記録するなど、7月末から8月初旬にかけてペソが上昇した分を戻す展開となった。

中旬以降はFED高官によるタカ派なコメントが相次いだ、フィリピン中銀総裁が12日開催の金融政策決定会合にて預金準備率の引き下げは議題に入っていないとコメントしたことや、フィリピンの第二四半期GDPが市場予想を上回ったことがペソのサポート材料となり、強弱材料が混じる中、比較的狭いレンジ推移となった。フィリピン中央銀行は12日の政策決定会合にて予想通り、6会合連続での政策金利据え置きを決定。

国内のコロナ感染者数の増加やロックダウンによる景気への悪影響を受けたリスクセンチメント悪化からペソはサポートとなっていた1米ドル＝50.50を突破し、2020年5月以来となる50.645までペソ安が進んだが、その後は7月のFOMC議事録が予想するほどタカ派ではなかったことや20日に外出移動制限の一段階引き下げが発表されたことに加え、株式相場への資金流入を受けて、ペソは大幅反発を見せた。

■ 今月の見通し

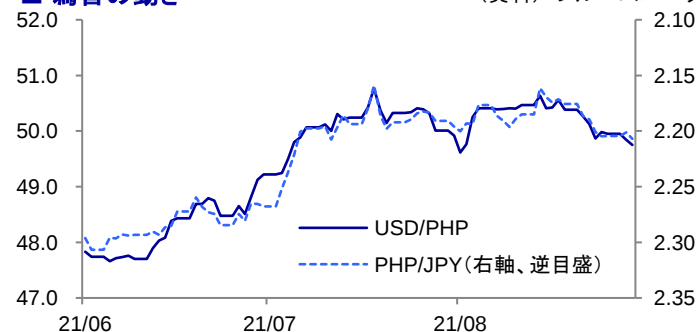
デルタ株感染拡大を受けたマニラ首都圏の外出移動制限の厳格化は一部緩和されたものの、依然、1日当たりの新規感染者が高止まりしており、今後の経済見通しへの不透明感が増大しており、他アジア通貨同様、ペソには下落圧力が掛かりやすい状況が今後も継続する可能性が高い。

また、FED高官から早期正常化に向けたタカ派発言が続くなど、年内のテーパリング開始の確度が高まっており、9月のFOMCが目先の注目材料であるが、強い米雇用指標やクラリダ副議長のタカ派発言を受けて、市場も早期正常化に対する準備もある程度できていると考えられ、パニック的なリスクオフとなる可能性は限定的と考えられる。

フィリピン中銀は事前予想通り8月12日の政策決定会合にて、景気サポートを優先とする緩和的スタンスを維持し、6会合連続での政策金利据え置きを決定。直近の消費者物価指数も4%に低下し、中央銀行がターゲットとする2-4%レンジに収まるなど、インフレ懸念後退により経済成長と労働市場がパンデミック前の水準近くまで回復するまで現状の緩和的スタンスを維持する余地もできている。金融政策の正常化に向かう米国と緩和継続見通しのフィリピンとの方向性の違いから、ドル高ペソ安地合いが継続し、1米ドル＝49.50-51.00をコアレンジとする推移が想定される。

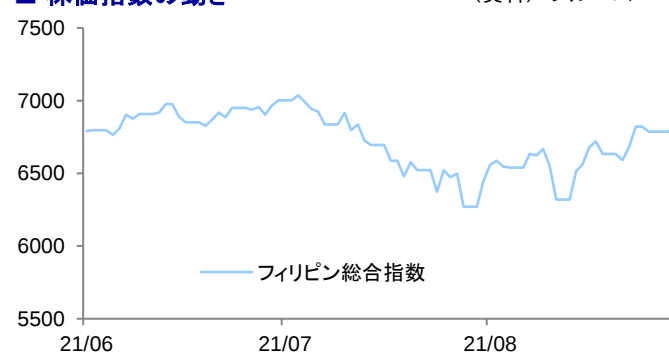
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 72.50 ~ 75.00
INR/JPY 1.45 ~ 1.53

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【8月の米ドル/インドルピーはもみ合い後、2か月半ぶりの安値圏へ下落】
74.385で当月取引を開始。月初に地場企業のIPOが予定されていたことから海外からの投資資金の流入が意識され、ルピー買いの地合い。4日には74.085まで下落し、その日だけで同水準から下を4度トライするも失敗。逆にインド中銀のドル買い為替介入に急速に水準を戻し、74.20近辺での推移。6日にはインド中銀政策会合の結果が公表され、事前予想通り金利は据え置き、市場への影響は限定的。

2週目に入ると、週末に発表されていた米雇用統計が良好な内容となっていたことからFRBの債券購入プログラムの先細り期待が高まり、アジア通貨全般が軟調推移。ただしインドではさらに地場企業2社がIPOの募集を開始、再度ルピー買いフローが想起され既述の米テーパリング期待のドル買いフローと対峙。その後、アトランタ地区連銀総裁とボストン地区連銀総裁から早期のテーパリングを示唆する発言が出るとドルインデックスが4か月ぶりの高値までドル買いとなる。ドル/ルピーもじり高で11日には当月の高値となる74.475を示現。ただし、米消費者物価指数が事前予想を下回るとテーパリング期待がやや後退、ドル/ルピーも74.20-30へと水準を戻した。

3週目に入ると米消費信頼感指数、小売売上高が共に芳しくない結果となるとドル買いが弱まったが、週半ばにFOMC議事録が公表され、事前予想を上回るタカ派な内容が確認されると、再度当月高値となる74.475まで上昇したが、こちらも滞空時間は短かった。週末27日には国内エネルギー大手が7億5千万ドルの米ドル建て社債を発行すると発表するとドルからルピーへの為替が意識されドル/ルピーは下落、チャートポイントであった74.10を下抜け、節目の74.00で一旦は粘ったが、期待されていたインド中銀のドル買い為替介入が出ないと見るや一気に下落、既存ドル買い持ち勢のストップロス巻き込みながら73.69まで安値追い。

4週目は米ジャクソンホールでのFRB議長の講演ではコロナの再拡大を指摘しながらもテーパリングについて明確なタイムラインの言及はなかったことから、マーケットでは失望感を誘い、ドルインデックスは0.4%下落、米10年国債利回りが1.31%へ低下するとアジア通貨全体が浮上。ドル/ルピーも73.205と6月半ば以来のルピー高水準まで下落、73.27で30日取引を終えた。

■ 今月の見通し

【9月のドル/ルピーは底堅い展開を予想】

米テーパリングについては、各高官が早期開始を示唆するような発言をしていたことから事前期待が高まっており、ジャクソンホールで議長から具体的なタイミングの示唆がなかったことから失望を呼ぶ結果となった。しかしながら、内容を精査すればインド株の広がりを強調しながら金融緩和を縮小してもそれが自動的に利上げに移行することではないとし、テーパリングと利上げを切り離して説明を行った。逆を返せば、(確かにタイミングを明確にはしなかったとはいえ)テーパリングは既定路線とも読み取れる内容。米国では日次新規感染者数が年初の30万人から5月以降は1万人を下回る日も続いたが、直近では再度30万人超まで激増している。ただし死亡者数は昨年末や今年年初対比で少なく、60%超となっているワクチン接種率が功を奏しているとも見える。米テーパリングについては遅かれ早かれ行われるものと考え、それに伴ったアジア新興国からアメリカへの資金流出についても予想を変える必要はないだろう。

8月末にドル安が進行する場面で、期待されていたインド中銀のドル買い/ルピー売り介入が出なかった。介入を当て込んでいたドルロング勢がポジションを切らされたことからルピー高の深度が大きくなった。ただ、インド中銀総裁は8月25日の地場紙のインタビューで、介入はドル/ルピーの相場の安定のために行う、またインドの外準については現状大幅な流入となっている海外資本を指摘し、今後外国資本がインドから流出した時にルピーを守るために必要であると述べた。翻ってみて、現状はというと、2営業日の間に1.3%超、ドル/ルピーは変動し、既述のように海外からの投資資金流入も堅調な状況が続いている。このことから、今後もインド中銀はドル買い介入を行うことは肯定される。

原油価格が8月は20日にかけて調整を挟んだが再度上昇していることも気がかりな点。

総じて現状のドル/ルピーの下落は一時的なものと予想し、インドの輸入企業におかれましてはドル買いの好機では。

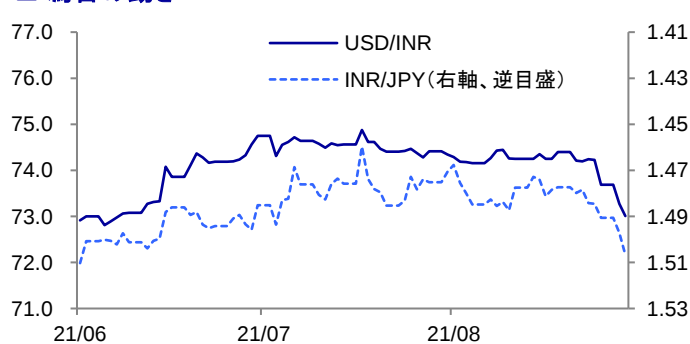
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

インドの人気スポーツといえば「クリケット」というのは、世界中で周知の話だ。日本ではあまりなじみがないが、世界での競技人口は3億人、またその半分をインドが占めている状況だ。インドでのネット検索ワードやテレビ視聴率では、常に1位に鎮座する。日常生活の中でも、そこかしこでクリケットに興じる子供たちをよく目にする。クリケット選手は、子供たちの憧れだ。これほどインドに根付いている注目のスポーツだが、残念ながら現在はオリンピック競技種目になっていない。クリケットがオリンピック競技種目になった暁には、インド中が金メダル獲得への期待に熱狂するであろう事は想像に難くない。そんな状況下での今回の東京オリンピック期間中、ネット検索ワードでクリケットを超えたワードが登場した。インドチームが41年ぶりにメダルを獲得した「ホッケー」だ。3位決定戦でドイツのペナルティゴールを防ぎメダル獲得を決定づけたゴールキーパーのスリージェシュ選手は、今回のオリンピックでの最大の貢献者と言われている。その功績から、彼の故郷のケララ州は彼の実家前の道路に彼の名前を付けたそう。ホッケーメダリストの功績は、その道を通る子供たちに未来永劫語り継がれていくことだろう。今回の盛り上がりで、クリケットのみならずホッケー選手を目指す子供たちも増えそう。 (チェンナイ・蛇名真理子)

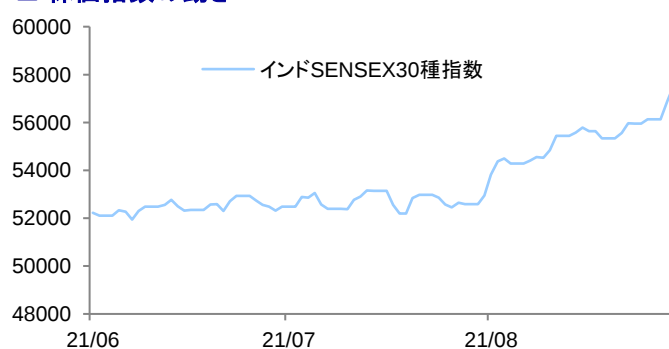
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

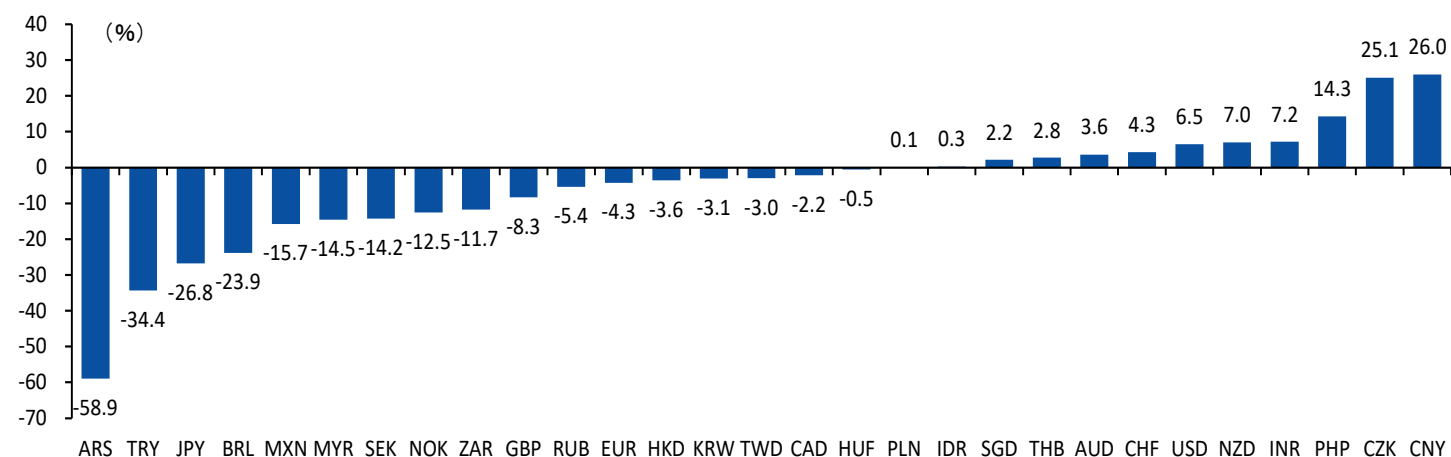
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	製造業PMI	7月	-	55.3	48.1
8/6	政策金利	-	4.00%	4.00%	4.00%
8/12	鉱工業生産	6月	14.0%	13.6%	28.6%
8/12	CPI	7月	5.72%	5.59%	6.26%
8/13	貿易収支	7月	\$11bio赤字	\$11bio赤字	\$9.3bio赤字

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2020年末	2021年8月末	騰落率	株式市場	2020年末	2021年8月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	30606.48	35360.73	15.5%	-
日本	USD/JPY	103.25	110.02	6.6%	日経平均株価	27444.17	28089.54	2.4%	-3.9%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2216	1.1809	-3.3%	ドイツDAX指数	13718.78	15835.09	15.4%	15.4%
英国	GBP/USD	1.367	1.3755	0.6%	ロンドンFTSE100指数	6460.52	7119.7	10.2%	9.5%
豪州	AUD/USD	0.7694	0.7316	-4.9%	S&P/ASX200指数	6587.096	7534.9	14.4%	20.3%
カナダ	USD/CAD	1.2725	1.2616	-0.9%	S&PTロント総合指数	17433.36	20582.94	18.1%	19.1%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5272	6.4607	-1.0%	上海総合	3473.069	3543.94	2.0%	3.1%
香港	USD/HKD	7.7531	7.7771	0.3%	香港ハンセン	27231.13	25878.99	-5.0%	-5.3%
インド	USD/INR	73.07	73.0063	-0.1%	インドSENSEX30種	47751.33	57552.39	20.5%	20.6%
インドネシア	USD/IDR	14050	14268	1.6%	ジャカルタ総合	5979.073	6150.299	2.9%	1.3%
韓国	USD/KRW	1086.51	1159.46	6.7%	韓国総合株価	2873.47	3199.27	11.3%	4.3%
マレーシア	USD/MYR	4.0203	4.1552	3.4%	ブルサマレーシアKLCI	1627.21	1601.38	-1.6%	-4.8%
フィリピン	USD/PHP	48.03	49.748	3.6%	フィリピン総合	7139.71	6855.44	-4.0%	-7.3%
シンガポール	USD/SGD	1.3221	1.3449	1.7%	シンガポールST	2843.81	3055.05	7.4%	5.6%
台湾	USD/TWD	28.094	27.667	-1.5%	台湾加権	14732.53	17490.29	18.7%	20.6%
タイ	USD/THB	29.959	32.234	7.6%	タイSET	1449.35	1638.75	13.1%	5.1%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2021年7月時点)



■ 実質GDP成長率

	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2019	2020
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	1.9	-5.1	-31.2	33.8	4.5	6.3	6.6	2.3	-3.4
日本*	-7.5	-2.3	-28.2	22.8	11.9	-3.7	1.3	0.0	-4.7
ユーロ圏	1.0	-3.2	-14.4	-4.0	-4.6	-1.3	13.6	1.4	-6.4
英国	1.2	-2.2	-21.4	-8.5	-7.3	-6.1	22.2	1.4	-9.8
豪州	2.1	1.4	-6.2	-3.7	-1.0	1.1		1.9	-2.4
カナダ*	0.4	-7.9	-38.1	41.7	9.3	5.6		1.9	-5.3
エマージングアジア									
中国	5.8	-6.8	3.2	4.9	6.5	18.3	7.9	6.0	2.3
香港	-3.6	-9.1	-9.0	-3.6	-2.8	8.0	7.6	-1.7	-6.1
インド	3.3	3.0	-24.4	-7.4	0.5	1.6		8.3	6.8
インドネシア	5.0	3.0	-5.3	-3.5	-2.2	-0.7	7.1	5.0	-2.0
韓国	2.6	1.5	-2.6	-1.0	-1.1	1.9	5.9	2.2	-0.9
マレーシア	3.7	0.7	-17.2	-2.7	-3.4	-0.5	16.1	4.3	-5.6
フィリピン	6.6	-0.7	-17.0	-11.6	-8.3	-3.9	11.8	6.1	-9.6
シンガポール	1.3	0.0	-13.3	-5.8	-2.4	1.5	14.7	1.4	-5.4
台湾	3.7	2.5	0.4	4.3	5.2	9.3	7.4	3.0	3.1
タイ	1.3	-2.1	-12.1	-6.4	-4.2	-2.6	7.5	2.3	-6.1

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	21/05	21/06	21/07	2019	2020
	(%)								(%)	
先進国										
米国	6.7	6.3	6.2	6.0	6.1	5.8	5.9	5.4	3.7	8.1
日本	3.0	2.9	2.9	2.6	2.8	3.0	2.9	2.8	2.4	2.8
ユーロ圏	8.1	8.2	8.2	8.1	8.1	8.0	7.7		7.6	7.9
英国	5.2	5.1	5.0	4.9	4.8	4.8	4.7		3.8	4.4
豪州	6.6	6.4	5.9	5.7	5.5	5.1	4.9	4.6	5.2	6.5
カナダ	8.8	9.4	8.2	7.5	8.1	8.2	7.8	7.5	5.7	9.6
エマージングアジア										
中国	4.2						3.9		3.6	4.0
香港	6.5	7.0	7.2	6.8	6.4	6.0	5.5	5.0	2.9	5.5
インドネシア			6.3						5.1	6.0
韓国	4.5	5.4	4.0	3.9	3.7	3.8	3.7	3.3	3.8	4.0
マレーシア	4.8	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5	4.8		3.3	4.5
フィリピン		8.7	8.8	7.1	8.7	7.7	7.7		5.1	10.4
シンガポール	3.3	3.2	3.0	2.9	2.9	2.8	2.7		2.2	3.0
台湾	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	4.2	4.8	4.4	3.7	3.9
タイ	1.5								1.0	1.6

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	21/05	21/06	21/07	21/08	2019	2020
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	1.4	1.4	1.7	2.6	4.2	5.0	5.4	5.4		1.8	1.2
日本	-1.2	-0.7	-0.5	-0.4	-1.1	-0.8	-0.5	-0.3		0.5	0.0
ユーロ圏	-0.3	0.9	0.9	1.3	1.6	2.0	1.9	2.2	3.0	1.2	0.3
英国	0.6	0.7	0.4	0.7	1.5	2.1	2.5	2.0		1.8	0.9
豪州	0.9			1.1			3.8			1.6	0.9
カナダ	0.7	1.0	1.1	2.2	3.4	3.6	3.1	3.7		1.9	0.7
エマージングアジア											
中国	0.2	-0.3	-0.2	0.4	0.9	1.3	1.1	1.0		2.9	2.5
香港	-1.0	2.6	0.5	0.6	0.8	1.0	0.7	3.7		2.9	0.3
インド	4.6	4.1	5.0	5.5	4.2	6.3	6.3	5.6		3.7	6.6
インドネシア	1.7	1.6	1.4	1.4	1.4	1.7	1.3	1.5		2.8	2.0
韓国	0.5	0.6	1.1	1.5	2.3	2.6	2.4	2.6		0.4	0.5
マレーシア	-1.4	-0.2	0.1	1.7	4.7	4.4	3.4	2.2		0.7	-1.1
フィリピン	3.5	4.2	4.7	4.5	4.5	4.5	4.1	4.0		2.5	2.6
シンガポール	0.0	0.2	0.7	1.3	2.1	2.4	2.4	2.5		0.6	-0.2
台湾	0.1	-0.2	1.4	1.2	2.1	2.5	1.9	2.0		0.6	-0.2
タイ	-0.3	-0.3	-1.2	-0.1	3.4	2.4	1.3	0.5		0.7	-0.8

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2019	2020
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.1	-2.5	-2.6	-2.9	-3.2		-2.2	-3.0
日本	3.4	3.4	2.9	2.9	3.3	3.4	3.9	3.4	
ユーロ圏	2.4	2.1	2.2	2.0	2.2	2.5		2.4	2.2
英国	-3.1	-2.4	-2.3	-2.2	-3.5	-3.2		-3.1	
豪州	0.7	1.2	1.8	2.0	2.7	3.2	3.3	0.7	
カナダ	-2.1	-2.1	-2.1	-2.0	-1.8	-1.0		-2.1	-1.8
エマージングアジア									
中国	0.7	0.3	0.9	1.3	1.8	2.4	2.0	0.7	
香港	5.9	4.7	5.8	6.9	6.5	9.0		5.9	
インド	-1.0	-0.8	0.4	1.3	1.3	0.9		-1.0	1.3
インドネシア	-2.7	-2.4	-2.1	-1.3	-0.4	-0.2	-0.1	-2.7	-0.4
韓国	3.7	3.8	3.6	3.8	4.4	4.9		3.7	
マレーシア	3.3	2.8	2.5	3.5	4.4	4.6	4.8	3.3	
フィリピン	-0.1	0.4	1.5	2.6	3.5	3.3		-0.1	
シンガポール	14.3	14.8	15.6	16.8	17.6	18.5	18.8	14.3	17.6
台湾	10.6	10.4	10.7	12.8	13.9	14.6	15.1	10.6	13.9
タイ	7.0	6.7	6.3	5.8	3.5	0.9		7.0	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向		
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項	
先進国									
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2021/6/16	現状維持	
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2021/7/16	現状維持	
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2021/7/22	現状維持	
英国	バンク・レート	0.10	緩和: 2020/3/11	0.75	2020/3/19	-15bp	2021/8/5	現状維持	
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2021/8/3	現状維持	
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2021/7/14	現状維持	
エマージングアジア									
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.85	緩和: 2012/6/8	6.31	2020/4/20	-20bp	2021/8/20	現状維持	
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2021/8/6	現状維持	
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2021/8/19	現状維持	
韓国	7日物レポ金利	0.75	引き締め: 2021/8/26	0.50	2021/8/26	+25bp	2021/8/26	+25bp	
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2021/7/8	現状維持	
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2021/8/12	現状維持	
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2021/8/4	現状維持	
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp	

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行